

鴻臚館跡 7

— 鴻臚館跡第Ⅰ期整備報告 —

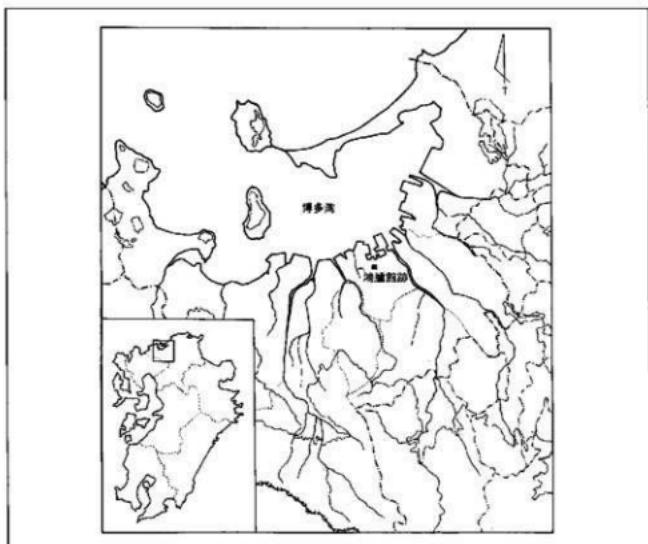
福岡市埋蔵文化財調査報告書第487集

1996

福岡市教育委員会

鴻臚館跡 7

— 鴻臚館跡第 I 期整備報告 —



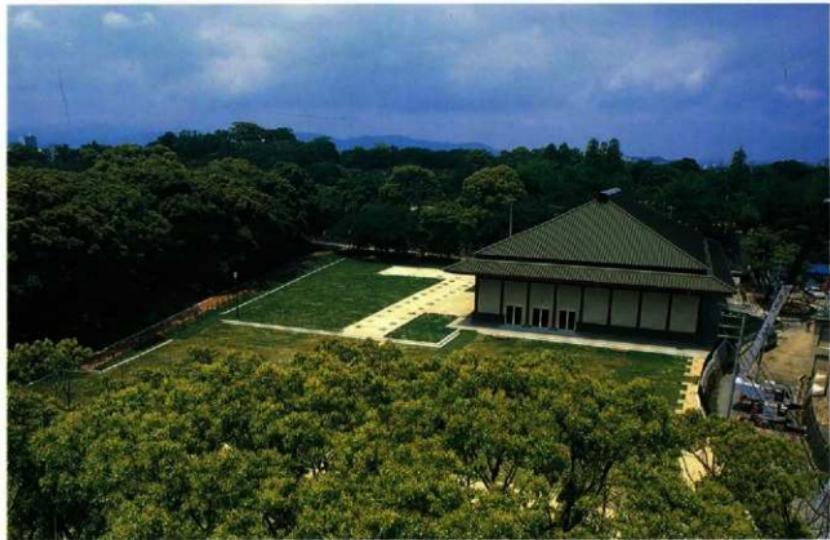
平成 8 年

福岡市教育委員会

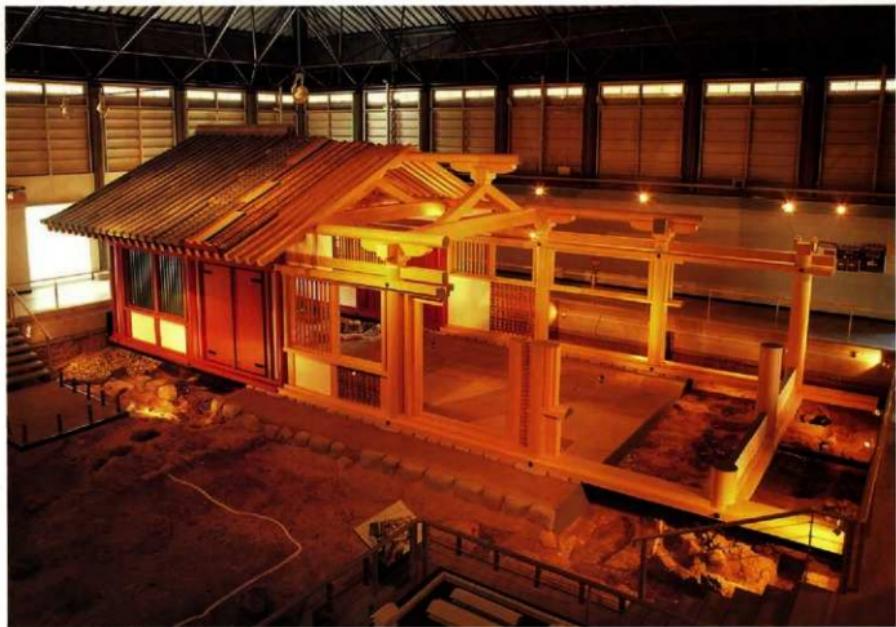
卷頭図版 1



(1) 鴻臚館跡周辺景観（南から）



(2) 鴻臚館跡第一期整備地全景（北東から）



(1) 展示館内建物模型（北東から）



(2) 奈良時代東門・堀・掘立柱建物遺構表示の状況
(北東から)



(3) 平安時代礎石建物遺構表示の状況（東から）

序

わが国の古代における外交施設である鴻臚館跡は、昭和62年末に、福岡市中央区の国史跡福岡城跡内にある平和台野球場外野席スタンドの改修工事の際に発見されました。昭和初期に故中山平次郎博士が当該地に推定されて以来、実に60年を経て、私たちの目の前にその姿の一端を現した鴻臚館跡からは、多量の中国産陶磁器をはじめとする国際色豊かな遺物が出土し、往時のアジア外交を物語る貴重な歴史的資料が発見されました。

この鴻臚館発見のニュースは、マスコミに大きく報道され、市民の皆様の関心を高め、いわゆる鴻臚館ブームを呼び起すこととなりました。本市はその当時、市制百年周年を迎えるにあたりましたが、鴻臚館の発見はまさに「海に開かれた活力あるアジアの拠点都市」づくりをめざす本市の歴史的原点の再認識につながるものでした。

本市では、昭和63年度に鴻臚館跡を包含する国史跡福岡城跡を本市のセントラルパークとして整備するにあたって「舞鶴城址将来構想委員会」を設置するとともに、学術的に非常に貴重な鴻臚館跡の全容解明を図るために、鴻臚館跡調査研究指導委員会を設置しました。その御指導の下で、発掘調査と関連資料の収集等を現在推進しております。

鴻臚館跡の発掘調査とともに、鴻臚館跡展示館において、関連造構の露山展示と調査成果の一部を公開してきました。しかしながら、展示館は本来アジア太平洋博覧会の仮設のミニパビリオンとして建てられたために老朽化が進んでいることに加え、最新の調査成果を盛り込んだ展示の見直しが必要となりました。

これにより本市では、平成5年度から7年度にかけて、平和台野球場南側（旧テニスコート）一帯を対象に、鴻臚館跡について市民の皆様が楽しく実感しながら学べるように、展示館の新築、原寸大復元建物模型の設置、展示館外における筑紫館から鴻臚館までの建物跡の造構表示を3本の柱とする遺跡整備を実施しました。

鴻臚館跡の本格的整備は、市民各層のご意見を尊重しながら、また遺跡の重要性に鑑みて慎重に進める必要があります。したがって整備完了までには相当の時間を要すると考えられることから、今回の第1期整備は当面の仮整備として実施したもので

本書は、この鴻臚館跡第1期整備事業の報告書です。本報告書が埋蔵文化財の御理解と御認識の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、整備計画の策定から実施、および本報告書の作成にいたるまで、ご理解、御協力頂いた大蔵省福岡財務支局、福岡市都市整備局、温かくご指導いただいた鴻臚館跡調査研究指導委員会委員の各先生方、文化庁、福岡県教育庁の皆様、また整備工事にあたりご協力を頂いた関係業者の方には深甚なる謝意を表します。

平成8年3月15日

福岡市教育委員会

教育長 尾 花 剛

例　　言

1. 本書は、平成5年度から7年度にかけて実施した鴻臚館跡第Ⅰ期整備事業の報告書である。
2. 本書の作成にあたっては、昭和62年度から平成6年度にかけて実施した鴻臚館跡発掘調査関係記録資料のほか、
　　舞鶴城址将来構想委員会編「舞鶴城址将来構想（中間とりまとめ）」1991
　　（株）志佐建築研究室編「鴻臚館跡展示館新築工事設計図」1994
　　（財）九州環境管理協会編「鴻臚館跡復原屋外第Ⅰ期整備設計委託業務報告書」1994
　　（株）京都科学編「鴻臚館跡礎石建物原寸大模型設計業務」1995
　　に掲載のデーター・地図・記録等真の一部を用いるとともに、平成4年度第1回～平成7年度第1回までの鴻臚館跡調査研究指導委員会で使用した図面および協議資料等を用いた。
3. 本書で用いた地図は、図2に国土地理院発行五万分の1地形図（NI-52-10-11/福岡11号）「福岡」を、図3に福岡市都市計画図NO60・61・71・72を使用した。
4. 本書で用いた方位は、平面直角座標系第II座標系であり、磁北方位は西偏6°40'である。
5. 道構は通し番号をつけた後、道構の性格を表記したアルファベットを番号の前に付した。
　　道構番号等については平成4年度までの調査時のままである。
　　標列・渠：S A○○、　井戸：S E○○、
　　建物跡：S B○○、　堀：S G○○、
　　溝状遺構：S D○○、　性格不明の上槽・豊穴：S K○○またはS X○○
6. 本書の執筆分担は、以下とのおりである。下記以外については田中壽夫が担当した。
　　なお、V 結語については、各分担者が持ち寄った問題点と課題について協議した結果を田中が総括した。
　　III-3(4)：福原正夫、瀧本正志
　　III-3(6)：瀧本正志
　　III-3(7)：松本伸三郎、瀧本正志
　　IV-2　：福原正夫
　　IV-5　：松本伸三郎
7. 編集は上記各分担者の助言を得ながら田中が担当した。
8. 編集に際しては、整理調査員 宮園登美枝、整理作業員 寺村チカ子、山口玲子、堀一恵、金石邦子、真鍋晶子、藤川紀子、早川曼代の補助を受けた。

鴻臚館跡第Ⅰ期整備報告

本文目次

I 序説	1
1. 鴻臚館跡の位置と概要	1
(1) 遺跡の位置と立地	1
(2) 歴史的環境	2
(3) 鴻臚館の概要	2
2. これまでの調査の経過と成果	4
(1) 鴻臚館跡の調査・研究の経過	4
(2) 平成6年度までの調査経過と成果	7
II 鴻臚館跡整備計画	9
1. 舞鶴城址将来構想について	9
2. 鴻臚館跡整備全体計画	10
(1) 全体計画	10
(2) 第Ⅰ期整備の位置づけ	10
III 第Ⅰ期整備計画	12
1. 第Ⅰ期整備の組織と構成	12
(1) 鴻臚館跡調査研究指導委員会の構成	12
(2) 平成5・6年度の体制	12
(3) 平成7年度の体制	12
2. 第Ⅰ期整備計画策定の経過	13
(1) 整備立案および構想の段階	13
(2) 基本計画および実施設計の段階	13
3. 第Ⅰ期整備計画の内容	14
(1) 計画の概要	14
(2) 整備事業費	15
(3) 全体計画	16
(4) 展示館建替計画	19
(5) 展示計画	26
(6) 建物模型製作計画	28
(7) 館外造構整備計画	34
IV 整備工事	40
1. 工事の全体概要	40
(1) 整備工事における法的な制約	40
(2) 整備工事における遺構保存のための条件設定	40
(3) 工事概要と工程	41
2. 展示館建設工事	42
3. 展示製作および照明工事	46
4. 建物模型製作	48
5. 館外造構整備工事	50
V 結語	53

挿図目次

図 1 福岡城跡図	1	図58 立会調査風景（北から）	40
図 2 鴻臚館跡と周辺の遺跡	3	図59 著工前旧展示館内状況（東から）	41
図 3 福岡城跡地内発掘調査地点位置図	5	図60 展示館新築工事起工式（業者主催）	41
図 4 第Ⅰ期東門と堀の検出状況	7	図61 遺構養生状況	42
図 5 第Ⅺ期掘立柱建物検出状況	7	図62 旧展示館解体状況	42
図 6 第Ⅲ期礎石建物検出状況（展示館内部分）	7	図63 新展示館基礎配筋状況	42
図 7 第Ⅲ期軒廊または回廊検出状況	8	図64 柱組立終了	42
図 8 第IV期土壌内遺物出土状況	8	図65 尾根トラス組立終了	42
図 9 第Ⅰ期トイレ遺構出土木簡（1/4）	8	図66 トラス支承部取り付け状況	43
図10 鴻臚館跡出土上古座陶磁器	8	図67 トラス組立状況	43
図11 舞鶴城址将来短期計画図	9	図68 尾根トラスおよび柱内部	43
図12 舞鶴城址将来構想イメージ図	11	図69 鋸り棟取り付け作業	43
図13 指導委員会審議風景	13	図70 尾根、下り棟、軒先巴	43
図14 整備前現況（北東から）	16	図71 二重軒先のようす	43
図15 整備前現況と周辺（西北から）	16	図72 ガラリ取り付け状況	44
図16 舞鶴公園（福岡城跡）内利用者動線図	17	図73 展示館受付および入口	44
図17 動線概念図	17	図74 館内南側階段施工状況	44
図18 整備地内における動線およびゾーニング計画	18	図75 階段完成状況	44
図19 旧展示館	19	図76 完成した展示館（正面）	45
図20 新旧展示館平面形比較図	20	図77 建物模型と屋根トラス	45
図21 展示館建設外観案比較図	21	図78 完成した展示館と造構整備（南東から）	45
図22 寄棟A案模型	21	図79 展示ボード製作風景	46
図23 設計当初案	22	図80 テーマカラー	46
図24 設計最終案	22	図81 コーナーサイン	46
図25 展示館基礎構造断面図	23	図82 「鴻臚館の精華」コーナー	46
図26 建物構造図	23	図83 館外サイン	46
図27 消防設備配置図	24	図84 ライティングレール取付状況断面図	47
図28 鴻臚館跡展示館正面および側面立面図・折り込み	24	図85 「鴻臚館の精華」コーナー展示状況	47
図29 展示館展示面・ゾーニングおよび動線概念図	26	図86 館内展示状況	47
図30 展示館展示面および立面図	27	図87 基壇部整地状況	48
図31 旧展示館内造構展示状況	28	図88 基礎鉄骨取付状況	48
図32 鴻臚館想像復元図（澤村仁氏作図）	28	図89 基礎工事基礎面整地	48
図33 建物復元対象範囲	28	図90 瓦レブリカ製作のようす	48
図34 復元建物イメージ図（素案）	28	図91 舟肘木の製作のようす	49
図35 復元想定平面および東西立面図	29	図92 仮組作業風景	49
図36 建築表現の変更対比図	29	図93 組立作業開始	49
図37 復元建物イメージ図（実施案）	29	図94 虹梁までの組立終了	49
図38 建物模型用所用瓦	30	図95 尾根の組立、瓦葺き作業	49
図39 基壇断面図	30	図96 展示館正面入口の作業風景	50
図40 基礎構造平面および柱脚部分断面図	31	図97 展示館正面入口の作業風景	50
図41 建物模型基礎部分詳細図	31	図98 北東部入口通り場粒石舗装作業	50
図42 建物復元緊急部分・平面・断面・部分立面図	32	図99 第Ⅰ期東門跡周辺の作業風景	50
図43 建物模型平面・断面および東西側壁立面図 折り込み	32	図100 管理用道路周辺の作業風景	50
図44 堀立面および断面図	33	図101 展示館東側の舗装作業風景	50
図45 背面扉門面および断面図	33	図102 公園東側（奈良時代の面）の芝張り作業	51
図46 造構整備イメージ図（素案）	34	図103 地被類植え込み作業	51
図47 整備A案イメージ図	35	図104 パイプ樋取付作業	51
図48 整備B案イメージ図	35	図105 皿形倒溝掘付作業	51
図49 整備C案イメージ図	35	図106 排水ピニール管の付設作業	51
図50 噴水使用例	35	図107 透水管付設作業	51
図51 整備実施計画イメージ図	36	図108 第Ⅰ期真砂土舗装作業	52
図52 第Ⅰ期堀の噴水による表示イメージ図	36	図109 第Ⅰ期堀の柱・輪木搬付作業	52
図53 第Ⅰ期東門・堀の噴水と立柱による表示イメージ図	36	図110 第Ⅱ期建物柱穴表示木レンガ埋込作業	52
図54 第Ⅰ期整備イメージ図（実施案）	37	図111 第Ⅱ期真砂土舗装作業	52
図55 第Ⅰ期整備実施計画要面図	37	図112 第Ⅲ期礎石搬付作業	52
図56 第Ⅰ期整備実施計画面図	37	図113 第Ⅲ期建物基壇の練石搬付作業	52
図57 第Ⅰ期整備実施計画部分詳細図	37	図114 見学風景	53

図版目次

- 卷頭図版 1 (1) 鴻臚館跡周辺景観（南から）
(2) 鴻臚館跡第Ⅰ期整備地全景（北東から）
卷頭図版 2 (1) 展示館内建物模型（北東から）
(2) 奈良時代東門・塔・掘立柱建物造構表示の状況（北東から）
(3) 平安時代礎石建物造構表示の状況（東から）

表目次

表 1 福岡城跡調査一覧	6	表15 新旧展示館展示面積比較表	26
表 2 鴻臚館跡整備方針(第Ⅰ期・第Ⅱ期整備)区分10		表16 主要部材重量比較表	30
表 3 鴻臚館跡調査整備事業中期計画表	11	表17 建物模型製作部材一覧	33
表 4 各整備項目実施経過概要表	13	表18 整備A案概要表	35
表 5 第Ⅰ期整備の概要	14	表19 整備B案概要表	35
表 6 鴻臚館跡第Ⅰ期整備事業費当初予算および財源内訳	15	表20 整備C案概要表	35
表 7 展示館入館者数年度別動向	16	表21 整備実施計画案概要	36
表 8 調査日別利用者数(昭和63年)	16	表22 噴水による造構表示の検討過程図表	36
表 9 推定年間利用者数(昭和63年)	16	表23 第Ⅰ期整備施設概要表	39
表10 旧展示館建物概要	19	表24 第Ⅰ期整備工事全体工程表	41
表11 新展示館建築案対比表	19	表25 トラス部品数量表	43
表12 使用色一覧	24	表26 館内照度状況一覧表	47
表13 消防用設備	24	表27 第Ⅰ期整備の問題点と課題	54
表14 展示館建築概要	25		

付図目次

付図 第Ⅰ期整備対象地における造構分布全体図(昭和62年度から平成6年度調査)

I 序 説

1. 鴻臚館跡の位置と概要

(1) 造跡の位置と立地

博多湾岸には西方から糸島平野、今宿平野、早良平野、福岡平野、柏原平野などの大小の沖積平野が分布している。筑紫館・鴻臚館は、この福岡平野と早良平野を分断しながら博多湾へ向かってほぼ真北に伸びる平尾丘陵から派生した小丘陵先端部に立地している。この地点は博多湾をめぐる海岸線のほぼ中央に突き出した小高い丘陵となっており、博多湾岸を一望できる絶好の地点を占めている。また博多湾内からこの地を臨むと志賀島、能古島を左右に見ながら航路上の一目標として現在の西公園（旧荒津）とともに非常に目立つ岬状の景観を呈している。

この地点は、福岡城築城以前は福崎と呼ばれていたところで、福岡藩初代藩主黒田長政が慶長6年（1601）年から7年の月日をかけて築造した福岡城が占地している。福岡城跡については昭和32年8月29日に国史跡に指定された。現在の行政区番では福岡市中央区城内1丁目である。

筑紫館・鴻臚館創建期の旧地形は、現在ではほとんどかがい知ることはできない。現景観は福岡城および城下町をベースとしているからである。福岡城築城に際しての当該地の地形については、貝原益軒『筑前国統風土記』によると、「城の西の方、むかしは福崎の汀まで入海有りて、広き潮入の斥地」で、「城の北の方町ある所、又乾の方荒戸、諸士の屋敷など、むかしは入海の潟也」と記し、また「城の南方は、赤坂山より本丸の山につきて、要害のためあしかりしかば、山をほり切りて障とし、隣の南の山をならして平らにす」と伝えている。現在の天神方面についての記述はみられない。

これまでの発掘調査、およびボーリング調査成果を加味し、福岡城の築城にあたっての造成工事についてみてみると、基本的に筑紫館・鴻臚館の造成を大きく踏襲しながら、その大部分が盛土によってなされたと考えられ、周辺の景観についてもほぼこの貝原益軒の伝聞に近いといえる。

筑紫館から鴻臚館の時代の景観については、博多湾岸に沿って鎌倉時代に築かれた元寇防星および海岸線の推定復元を基準に^{1,2}し、下山正一氏や磯望氏らによる博多湾岸汀線変化の分析の成果に依りながら、ボーリング資料を参考に現在その推定復元を行っているところであるが、当該地は江戸期に叙述された状況以上に、博多湾に突き出しながら島状に浮かぶ小高な岬であったことが想定できる。



図1 福岡城絵図

(2) 歴史的環境

北部九州はその地理的特性から大陸との文化的交流を物語る遺跡が広く分布している。特に博多湾岸の各平野には、古代の遺跡が非常に高い密度で分布していることは周知の事実である。

ここでは筑紫館と鴻臚館が存続した古代に限って湾岸周辺の関連遺跡を概観したい。

当該地点より直線距離にして約12.3km南東方向に水城跡が、さらに水城から東方に2.5kmには大宰府政庁跡、大野城跡がある。大宰府では政庁跡を中心に官衙遺構や水城跡の調査が進められており、古代都市としての大宰府条坊制の広がりや条坊内における官衙や官人各層の建物群やその構成の一端が明らかにされつつある。また最近の水城跡周辺の発掘調査で水城西門を発する直線的道路が部分的に確かめられており、鴻臚館と大宰府を結ぶ官道とされているが、福岡市域内では未確認である。

大宰府が職掌する官衙関連の遺跡として、海の中道遺跡がある。博多湾北縁に東西に伸びる砂州上に形成された遺跡で、鴻臚館跡とは海を挟んで対峙している。製塗土器や漁労具、石帶、皇朝十二銭などが出土しており、東区三芳遺跡とともに厨戸396の一つと考えられている。また主船司に関連する遺跡として西区徳永遺跡があり、越州糞系青磁、長沙窯系水注などの輸入陶磁器が出土している。郷家、駅家等の何らかの官衙遺跡と考えられるものに東区の多々良込出遺跡、博多区博多遺跡群内の奈良期の造構群、南区の柏原遺跡、西区下山門遺跡、橋本櫻田遺跡などがある。

このように、博多湾沿岸部には筑紫館・鴻臚館と何らかの関連性を物語る遺跡が散見できるが、鴻臚館跡の全容解明は、大宰府も含めて、これらの遺跡も視野に置きながら進める必要があることはいうまでもない。

(3) 鴻臚館の概要

鴻臚館は、わが国の古代律令制下で、「蕃客辟見、譲饗送迎」を職掌する治部省玄蕃寮の所管下にある館舎である。史料では平安京、難波、筑紫の3ヶ所に置かれたことが知られている。前二者が玄蕃寮直轄だったのに対して、筑紫の鴻臚館は大宰府の管理下にあった。

鴻臚館が史料上初めて現われるのは、「日本紀略」弘仁元年(810)四月朔条「饗渤海使高南容等於鴻臚館」である。ただしこの記事の鴻臚館は、平安京もしくは難波の客館を指す。筑紫の鴻臚館は、慈覚大師圓仁の「入唐求法巡礼行記」承和14(847)9月18日条に記載された「到鴻臚館前」をもって初見とする。また通例、鴻臚館の最後の記事は寛治5年(1091)8月、「於鴻臚館、以人宋商客季居簡模本、或比較之...」とされる。

鴻臚館の名称は弘仁年間に中国唐代の「鴻臚寺」に習い、それまでの難波館および筑紫館を鴻臚館に改称したと考えられている。筑紫館の初見は持統天皇2年(688)であるので、史料上では、前身の筑紫館の時代も含めて7世紀後半から11世紀末までの約400年間にわたって、筑紫の鴻臚館はわが国の外交施設として機能したといえる。筑紫の鴻臚館が長期にわたって存続したのは、亀井明徳氏が指摘するように、「諸蕃通交の閑門であり、外国使節受け入れの唯一の窓口」であったからに他ならない。⁴⁾この間における鴻臚館の機能およびその質的な変化については、森克己博士、亀井氏、平野邦雄氏らの研究がある。詳細はそれらに譲るが、概ね、9世紀前半、承和年間を境に、律令制度の弛緩とともに、それまでの公的外交施設から私的商取引の場へと変質していったことが指摘されている。

(注)

1. 中山平次郎「博多湾の海岸線」地図3-1 1925(『古代の博多』1984に補訂掲載)
2. 柳田純孝「元寇防壁と博多湾の地形」「古代の博多」九州大学出版会 1984
3. 下山正一他「福岡市鳥飼低地の海成第四系と更新世後期以降の地形形成過程」「地球惑星科学」第17巻第1号 1991
4. 亀井明徳「大宰府鴻臚館の実像—構造と遺跡の再検討—」古文化叢書第1号 1974
5. 森 克己「新訂日宋貿易の研究」 国書刊行会 1975
6. 平野邦雄「鴻臚館の成立」 古代文化42 1990

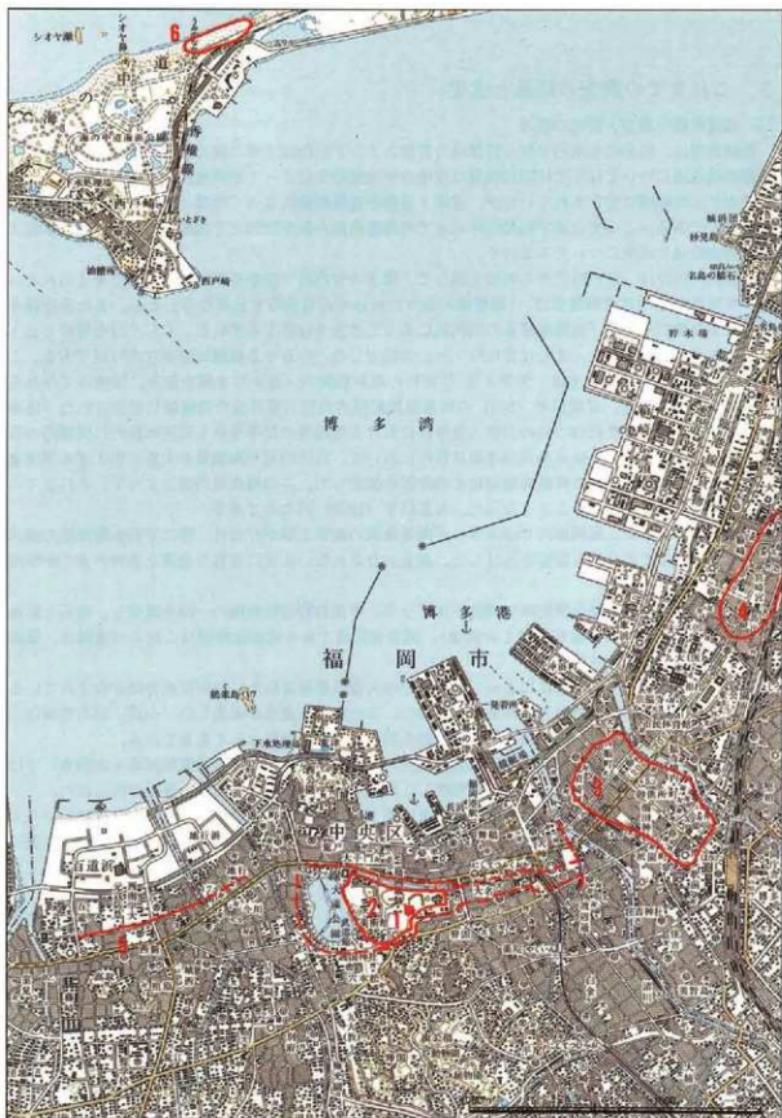


図2 鴻臚館跡と周辺の道路

1. 鴻臚館跡 4. 箱崎遺跡跡
 2. 福岡城跡(国指定史跡) 5. 元寇防星跡(国指定史跡)
 3. 博多遺跡群 6. 海の中道遺跡

2. これまでの調査の経過と成果

(1) 鴻臚館跡の調査・研究の経過

鴻臚館跡は、昭和62年末の平和台野球場外野席スタンドの改修工事の際に発見、確認された。鴻臚館跡の所在地についてはすでに昭和初期に故中山平次郎博士によって福岡城跡内の平和台野球場南側を中心とした範囲に推定されていたが、遺構・遺物が発掘調査によって明確に確認されたのはこの時が初めてである。ここではまず昭和62年末までの鴻臚館跡の調査研究史を概観し、次に平成6年度までの調査経過と成果についてみて行く。

鴻臚館の所在は、江戸時代から明治を通して、博多の官内町（現中呉服町）あたりと考えられている。黒田藩の儒学者青柳種信は、「鴻臚館の在りし所は今の官内町と云所なり」とし、また長野種正は「博多鴻臚館考」で「此館址博多の内何處にありしと云うは詳ならざれど、もしくは今堅町と云う是館町の遺名ならんか・・または官内町・・」と推定した。いわゆる鴻臚館博多官内町説である。これに対して中山平次郎博士は、天平8年（736）の遣新羅使の「邊かに本邸を望み、懐愴みて作れる歌」が詠われた場所、貞觀11年（869）の新羅海賊船博多鴻羽入事件後に鴻臚館に付設された「博多警固所」の所在、11世紀はじめの刀伊入寇事件における警固所の記事等から福岡城跡内に鴻臚館の存在を想定した。さらに旧陸軍歩兵24連隊兵営内において、古代の瓦や陶磁器が大量に出土する事実を確認し、当時置かれていた弾薬庫周辺にその位置を推定した。この福岡城内説によって、それまでの博多官内町説が見直されることになった。大正15年（1926）のことである。

昭和22年～34年に、福岡城内ではスポーツ関連施設の建設工事が行われ、特に平和台野球場の建設は追跡保存の上で致命的な影響を及ぼした。調査がなされないままに貴重な遺構と遺物の多くが消滅したことは惜しまれる。

昭和26年に九州文化総合研究所が調査主体となり、平和台野球場南側の一画を調査し、礎石と雨落ち溝を確認している（鴻臚館跡第1次調査）。調査責任者である鏡山猛教授はこれらの遺構は、警固所の一部と考えていたと聞く。

昭和28年には、小山富士夫氏によってそれまでの大量の表探資料中に越州窯系青磁が含まれていることが確認され、鴻臚館跡の可能性をより高めた。また高野孤鹿氏が採集した「小舟」銘石製硯は、9世紀半ば以降活躍した中国の商人たちの活動を間接的に知る資料として貴重である。

昭和42年の福岡高等裁判所建設地内（福岡城三ノ丸東側郭内）の調査（鴻臚館跡第2次調査）では、当該地が孤立丘または島であったことが判明し、鴻臚館創建時の地形復元の一資料が得られた。

昭和51～52年にかけて実施された地下鉄工事に伴う福岡城内堀外壁の調査で、石垣裏込め内から大量的古代瓦と越州窯系青磁片が出土し、これまでの採集資料も含めた鴻臚館跡出土資料の集成作業の必要性を喚起した。調査報告書には高野氏の表探資料と、九州文化総合研究所が調査した際に出土した越州窯青磁が合わせて掲載され、鴻臚館跡研究の一侧面である遺物研究の端緒を開いた。

亀井氏は、表探資料の分布や鴻臚館研究に関わりのあった人々の証言、立地上の問題を総合的に検討し、平和台野球場中央からテニスコートの範囲に、方一町規模で東を正面とする鴻臚館関連施設を想定した。発掘のメスを入れることが難しい中で、遺跡としての鴻臚館跡研究の方向性を示されたことは意義深いものがあった。

（注）

- | | | |
|--|---------------------|-----------|
| 1. 中山平次郎「古代の博多」1～7 | 考古学雑誌第16巻6号～第17巻10号 | 1926～1928 |
| 2. 高野孤鹿『平和台の考古史料』（プリント） | | 1972 |
| 3. 小山富士夫「鴻臚館址出土の越州窯青磁片」 | 1953年1月6日付朝日新聞朝刊 | |
| 4. 福岡県教育委員会「史跡福岡城発掘調査概報」 | | 1961 |
| 5. 折尾洋・池崎謙二「福岡城址～内堀外壁石積の調査～」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第101集』 | | 1983 |
| 6. 九州大学考古学研究室「九州大学考古学研究室所蔵の平和台出土遺物」 | " | 1983 |
| 7. 池崎謙二・森本朝子「福岡市立歴史資料館所蔵の高野コレクション」 | " | 1983 |
| 8. 丹橋知紀「光美術館の高野コレクション」 | " | 1983 |
| 9. 亀井明徳「大宰府鴻臚館の実像—構造と遺跡の再検討—」古文化研究 第1号 | " | 1974 |

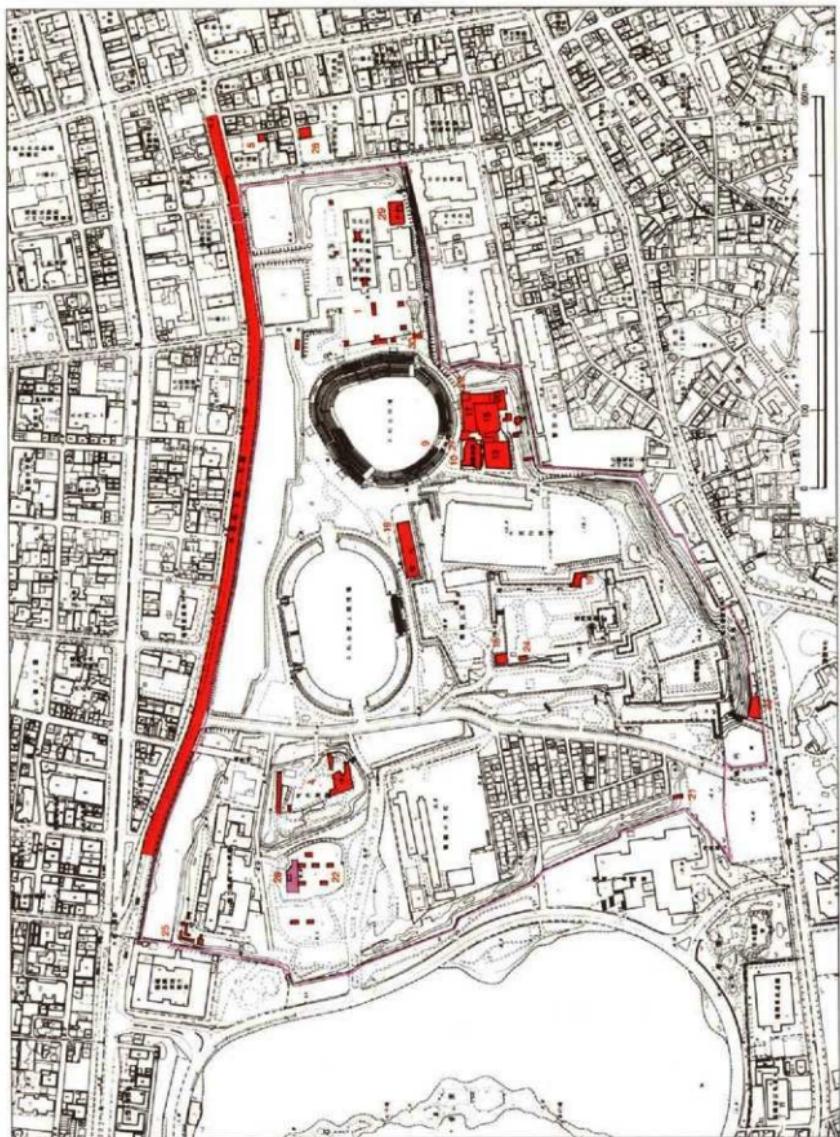


図3 福岡城跡地内発掘調査点位置図

表1. 福岡城跡調査一覧

(平成6(1994)年度まで)

凡例 史跡整備：教育委員会所管事業、公園整備：都市整備局所管事業
確認調査：福岡城跡・鴻臚館跡の調査。工事名のある調査は緊急調査

調査番号	次数	地 区	跡地内区分	調査原因	調査箇所	調査期間	調査担当者	文 献	備 考
	A	三ノ丸中央部	史跡内	テスコ建設		510800~3日間	九州文化総合研究所	1・7・11	鴻臚館跡1次
	B	三ノ丸西北部	史跡内	国病院建設		590626~590702	文部省文化財保護委員会	1	
6301	1	三ノ丸東部	史跡内	裁判所建設	596	631007~631105 640327~640331	福岡県教育委員会	2	鴻臚館跡2次
7605	2	内堀内壁	史跡外	地下鉄建設	14,900	761201~771008	折尾 学、池崎謙二 浜石哲也、山崎龍雄	4	
7728	3	薬院新川	史跡外	地下鉄建設	500	780301~780630	折尾 学、池崎謙二	4	
7948	4	御殿屋敷跡	史跡内	史跡整備	2,200	790719~790811	飛高憲雄、力武卓治	3・8	
8134	5	赤坂門北側内堀	史跡外	ビル建設	70	820317~820326	田中壽夫	4	
8343	6	祈念橋跡	史跡内	史跡整備	36	840201~840612	井沢洋一		移復元整備
8449	7	肥前堀東端部	史跡外	県公園建設	580	840601~840612	福岡県教育委員会		肥前堀1次
8533	8	肥前堀東部	史跡外	市庁舎建設	150	850700~850800	折尾 学、山崎純男	9	肥前堀2次
8747	9	三ノ丸中央部	史跡内	野球場改修	650	871225~880120	山崎純男・吉武 学	11・14	鴻臚館跡3次
8829	10	三ノ丸中央部	史跡内	確認調査	856	880727~881210	山崎純男・吉武 学	11・21	鴻臚館跡4次
8865	11	内・南縁土塁	史跡内	公園整備	500	880727~881210	山崎純男・吉武 学	10	
8840	12	肥前堀東部	史跡外	ビル建設	650	881107~881126	柳沢 一男	12	肥前堀3次
8910	13	三ノ丸中央部	史跡内	確認調査	1,200	890402~891207	山崎純男・吉武 学	11・21	鴻臚館跡5次
8950	14	肥前堀東部	史跡外	市庁舎建設	700	891011~891021	菅原正人	13	肥前堀4次
9005	15	三ノ丸中央部	史跡内	確認調査	1,300	900409~910131	山崎純男・吉武 学	11・21	鴻臚館跡6次
9065	16	月見櫓跡	史跡内	確認調査	190	910301~910331	山崎純男・吉武 学	15	
9130	17	三ノ丸中央部	史跡内	確認調査	1,000	910501~920331	山崎純男・瀧本正志	16・21	鴻臚館跡7次
9146	18	時櫓跡	史跡内	確認調査	250	920301~920331	瀧本正志		
9218	19	三ノ丸中央部	史跡内	確認調査	1,670	920615~921030	山崎純男・瀧本正志	17	鴻臚館跡8次
9236	20	三ノ丸中央部	史跡内	確認調査	430	920910~930331	山崎純男・瀧本正志	17・21	鴻臚館跡9次
9262	21	花見櫓跡	史跡内	確認調査	200	930301~930331	瀧本正志		
9326	22	三ノ西郭部	史跡内	確認調査	450	930816~940228	田中壽夫・瀧本正志	19	鴻臚館跡10次
9345	23	追廻門南側塀	史跡外	公園整備	220.3	931213~940228	井沢洋一	18	
9353	24	本丸西縁土塁	史跡内	公園整備	80	931211~931221	田中壽夫・瀧本正志		
9363	25	潮見櫓跡	史跡内	史跡整備	65	940301~940328	田中壽夫・瀧本正志		
9412	26	赤坂門石垣	史跡外	変更所建設	430	940525~940806	吉武 学		
9420	27	三ノ丸中央部	史跡内	史跡整備	50	940606~940731	田中壽夫・瀧本正志	20	鴻臚館跡11次
9432	28	三ノ丸西郭部	史跡内	確認調査	850	940801~950320	田中壽夫・瀧本正志	20	(n)
9451	29	三ノ丸東部	史跡内	施設整備	1024	941101~950130	吉武卓治		
9463	30	三ノ丸南側土塁	史跡内	確認調査	60	950201~950217	田中壽夫・瀧本正志	20	(n)

調査報告書・文献一覧

- 高野孤庵 「平和台の考古史料」
 - 福岡県教育委員会 「史跡福岡城址発掘調査報告」
 - 福岡市教育委員会 「筑前国福岡城三ノ丸御殿屋敷」
 - 福岡市教育委員会 「福岡城址一内堀外壁石塁の調査」
 - 池崎謙二・森本朝子 「福岡市立歴史資料館所蔵の高野コレクション」
 - 弓削知紀 「山光美術館の高野コレクション」
 - 九州大学考古学研究室 「九州大学考古学研究室所蔵の平和台出土遺物」
 - 福岡市教育委員会 「筑前国福岡城三ノ丸御殿屋敷跡調査」
 - 福岡市教育委員会 「福岡城跡」
 - 福岡市教育委員会 「福岡城跡・IV-内堀外壁石塁の調査」
 - 福岡市教育委員会 「「福岡城跡」発掘調査概報」
 - 福岡市教育委員会 「福岡城跡第3次調査報告」
 - 福岡市教育委員会 「福岡城跡崩壊第4次調査報告」
 - 福岡市教育委員会 「鴻臚館跡2発掘調査概報」
 - 福岡市教育委員会 「福岡城 月見櫓」
 - 福岡市教育委員会 「鴻臚館跡3発掘調査概報」
 - 福岡市教育委員会 「鴻臚館跡4 平成4年度発掘調査概報」
 - 福岡市教育委員会 「福岡城跡第23次調査報告」
 - 福岡市教育委員会 「鴻臚館跡5 平成5年度発掘調査概報」
 - 福岡市教育委員会 「鴻臚館跡6 平成6年度発掘調査概報」
 - 福岡市教育委員会 「鴻臚館跡7 鴻臚館跡Ⅰ期整備報告」
- 福岡市埋蔵文化財調査報告書第59集 1990
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第101集 1983
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第101集所収 1983
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第101集所収 1983
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第101集所収 1983
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第131集 1990
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第237集 1991
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第270集 1991
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第293集 1992
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第294集 1992
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第315集 1992
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第316集 1992
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第355集 1992
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第372集 1994
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第415集 1995
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第416集 1995
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第486集 1996
 福岡市埋蔵文化財調査報告書第487集 1996

(2) 平成 6 年度までの調査経過と成果

平成 6 年度までの鴻臚館跡調査は、平和台野球場南側（第 1 期調査区）と、舞鶴公園西広場とよばれる福岡城三ノ丸西郭（第 2 期調査区）の 2 地区を対象に実施してきた。

第 1 期調査区は昭和 63 年度から平成 4 年度までの 5 ヶ年にわたって調査を実施した部分であり、今回の整備対象地でもある。第 2 期調査区は平成 5 年度と 6 年度に調査を行った。

1) 第 1 期調査区（鴻臚館跡 4 ~ 9 次）古墳時代から近代までの遺構と遺物が出土している。奈良時代から平安時代の遺構群は 4 時期に大きく分かれる。

第 I 期遺構群は東門路とそれに付設する堀、掘込地業、トイレ遺構がある。筑紫館創建時の大規模な造成跡が第 7 ~ 9 次調査で確認された。東門路は幅約 1.2m 前後、深さ約 1.5m の 4 条の布堀遺構が確認された。規模は梁行 2 間（5.40m）桁行 3 間（7.80m）である。桁行のうち中央間が 3.60m (12 尺) で、脇間がそれぞれ 2.10m (7 尺) である。基壇等については不明である。堀はその基礎部分である布堀遺構を確認されている。幅 1.0 ~ 1.2m、深さは 1.5m 前後で、壁面はほぼ垂直に掘削されている。柱位置は東門と同様二段掘りである。堀を支える柱間は 2.40m (8 尺) である。堀は柱芯間で東西に 71.5m (240 尺・30 間)、南北に 55.4m (186 尺・20 間 + 26 尺) の長方形区画を成す。東門路は堀の東辺中央に位置する。堀で囲まれた区画内の南西隅に、建物の基礎と思われる掘込地業がある。平面形は東西辺約 5.6m、南北辺約 11m の長方形で、地表面から深さ 2.4m まで掘り下げ、版築によって土壌内を突き固めている。建物の構造等を示す遺構は確認できていない。トイレ遺構は、区画外西南部に大小 3 基が確認された。第 I 期遺構群の廃絶の時期は出土遺物からみて 8 世紀前半頃よりもやや新しい時期に比定される。

第 II 期遺構群は、掘立柱建物が 4 棟確認されている。柱穴はいずれも一辺 1.0 ~ 1.2m の方形の掘り方である。東西棟 2 棟は柱穴芯間で 3.0m 離れて直線的に東西に並ぶ。柱間は桁行が約 2.54m、梁行が約 2.10m である。南北棟 2 棟は、同じく 3.0m 離れて直線的に南北に並ぶ。東西 2 棟とはほぼ直交する。柱間は北側の棟が桁行約 2.70m、梁行が約 2.0m である。南側の棟は桁行 2.85m、梁行 2.0m である。これらの建物は柱穴の配列と柱間の長さからみて若干の時期差があると考える。第 II 期の時期は現在までのところ判然としない。

第 III 期は大型の礎石建物の時期である。遺構は、南北に長い礎石建物 2 棟分の基壇跡と礎石および礎石抜き跡とこの 2 棟の建物と直交する東西方向の建物、また南門と推定される基壇跡が確認された。全体配置については、東側半分の遺構の削平が顕著なため明かではない。南北に延びる 2 棟の建物は並列しており、西側の棟は梁行 2 間（5.96m）、桁行が 10 間（29.8m）以上の細長い建物で、桁行 7 間を 1 単位とする房が連続する本瓦葺切妻造り平屋建と推定している（今回の整備で復元対象とした建物である）。東側の棟は、西側の棟の基壇端から 30 尺（9 m）離れている。梁行が 4 間（11.92 m）、桁行が 9 間（26.82m）以上の長大な建物で、東西側に庇を有している。東西に延びる建物は 2 棟の建物を結ぶための軒廊または回廊と思われる。梁行は 1 間または 2 間で、複



図 4 第 1 期東門と堀の検出状況



図 5 第 II 期掘立柱建物検出状況

図 6 第 III 期礎石建物検出状況
(展示館内部分)

廊の可能性が指摘されている。第III期建物群全体の構成を考える上で重要な鍵となる建物遺構である。第III期遺構群の終末の時期は、第IV期の遺構群との切り合い関係から、10世紀前半代頃と考えられる。

第IV期の遺構群は廐棄用の土壙群が主であり、いずれも、第III期礎石建物が廐棄された後の所産で、10世紀代から11世紀の前半代の時期に比定される。

第IV期遺構群に伴う建物跡についてはこれまでのところ確認できておらず、鴻臚館の終焉時期の問題と絡んで今後の調査上の課題である。

第2期調査区（鴻臚館跡10～11次）では鴻臚館西辺域の範囲推定、鴻臚館創建時の旧地形の復元を主目的として実施した。

鴻臚館に直接関連する遺構は検出できなかったが、出土遺物には奈良時代から平安時代の須恵器、土師器、中国越州窯系青磁等の遺物が出土している。この地点での成果は、福岡城築城時の大規模な造成工事跡を確認したことが挙げられる。

2) 出土遺物 鴻臚館跡を特色づける遺物として、大量の瓦以外に、外国産の陶磁器があげられる。中でも鴻臚館貿易が最盛期を迎える9世紀から10世紀代の越州窯系青磁が圧倒的多数を占めており、この現象は、新羅商人にとって変わった中国明州や福州周辺の商人たちの活動と符合するものである。このほか、7世紀代から9世紀代の新羅焼、ペルシャガラス器、イスラム陶器などがあげられる。また、第I期のトイレ遺構からは、国産須恵器や土師器、新羅陶器、中国産陶磁器の他に、木簡片や木筒を転用した籌木が大量に出土した。一部には「肥後國天草郡志記里□・・」「庇羅郷甲口煮一斗・・」等の墨書きが残っているものがある。

今回の整備においては、平成6年度までのこれらの調査成果を踏まえて、鴻臚館をより実感しながら理解できるように、第I期遺構である東門と堀、第II期遺構の掘立柱建物を平面的な遺構表示の対象として選び、また第III期遺構である礎石建物については、並列する2棟の南北棟のうち西側に位置する回廊または子房的建物を対象として、展示館内で原寸大に建物の一部を復元し、館外では礎石と基壇の平面的な復元を行った。



図7 第III期糞廐または回廊および第I期トイレ検出状況



図8 第IV期土壤内遺物出土状況

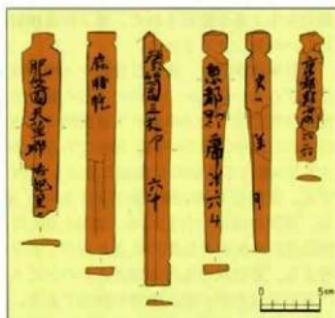


図9 第I期トイレ遺構出土木簡(1/4)



図10 鴻臚館跡出土中国産陶磁器

II 鴻臚館跡整備計画

1. 舞鶴城址将来構想について

鴻臚館跡第Ⅰ期整備計画を説明する前に、当該計画の上位理念にあたる舞鶴城址将来構想について述べておきたい。

昭和62年末の鴻臚館跡の発見を契機に、鴻臚館跡を含む福岡城跡および大濠公園一帯を福岡市のセントラルパークとして整備する気運が高まった。昭和63年度には、福岡市教育委員会に鴻臚館跡調査研究指導委員会が置かれ、鴻臚館跡の学術的な解明を担う体制が整うとともに、都市整備局には舞鶴城址将来構想委員会が設置され、都心部に位置する福岡城跡と鴻臚館跡を中心とした公園整備を本市のまち作りの視点から検討する場が設けられた。設置後約3年の審議を経て、平成3年5月に構想委員会から「舞鶴城址将来構想（中間とりまとめ）」が答申された。

この構想は、福岡城跡を「福岡の歴史・文化の拠点空間」「都心部の緑・憩いの拠点空間」と位置づけ、「この2つの空間の機能的融合と景観的調和を図る」ために、将来的に福岡城跡と鴻臚館跡を中心とする歴史公園として整備し、「アジアの拠点・国際文化都市をめざす福岡のシンボル」を創造するというものである。この将来構想を実現するための前提条件として、城跡内に点在している公共および民間各施設を段階的なスケジュールで移転する方針が明記されており、平成24年度頃の完成を最終目標とした短期および中期計画が示されている。

構想の核となる鴻臚館跡と福岡城跡については、「復元材料が揃えば、古代の国際交流の歴史が学べ、同時に国際交流の振興の場となるように復元整備する。福岡城跡は積極的な復元整備を図り、城郭研究施設あるいは近世文化の研究展示施設としての利用を考える。」としている。

鴻臚館跡の整備はこの将来構想の一環として位置づけられるものであり、福岡城跡の環境整備との調和を図りながら推進される必要がある。したがって、鴻臚館跡の本格的整備が計画段階に入った時点で、それを包含する福岡城跡整備の全体計画に正しく位置づけられた基本計画の策定が、舞鶴城址将来構想の基本理念の実現のためにも必要かと思われる。整備推進の体制も含めて将来の課題である。

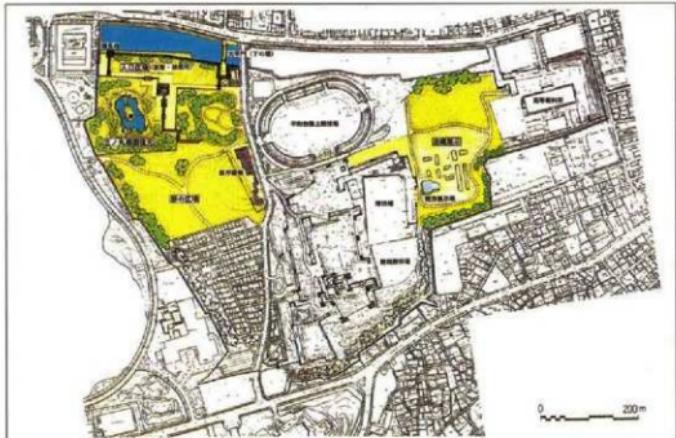


図11 舞鶴城址将来短期計画図

2. 鴻臚館跡整備全体計画

(1) 全体計画

平成5年度第2回鴻臚館跡調査研究指導委員会で、鴻臚館跡の全体的整備方針について下記の内容で了承を受けた。

①「舞鶴城址将来構想（中間取りまとめ）」の下で、福岡城跡全体の整備計画と整合性を持たせながら実施して行く。

②当面の整備課題である平和台野球場南側（旧テニスコート）部分を第Ⅰ期整備とし、平成7年8月23日開催予定のユニバーシアード大会までに整備する。

③平和台野球場撤去後の発掘調査に基づく整備を第Ⅱ期整備とし本格的に整備を行う。

全体計画は今回の第Ⅰ期整備と将来的第Ⅱ期整備を含めた鴻臚館跡推定範囲全体の整備計画である。本格的整備をめざす第Ⅱ期整備は、平和台野球場撤去後の発掘調査を踏まえて計画の検討を行い、その間、遺跡そのものの調査と保存整備に併わる調査研究を進めて行く方針である。鴻臚館跡の整備において最大の課題は、遺跡整備そのものをどのように行うかということはもちろんのこととして、舞鶴城址将来構想で示された方向に沿いながら、鴻臚館跡を包含している福岡城跡との調和をどう図って実施するかという点である。第Ⅱ期整備ではその点を踏まえながら、基本構想から製作・施工・完成まで約10ヶ年をかけて実施する予定である。

(2) 第Ⅰ期整備の位置づけ

今回の第Ⅰ期整備は、鴻臚館跡の全体計画において、第Ⅱ期整備が着手され完成するまでの暫定的な仮整備という位置づけで実施した。これは、整備対象地が鴻臚館跡推定範囲のごく一部であり、鴻臚館跡の主要部分が平和台野球場部分に含まれていることから、全容解明には相当の時間を要すると考えられることと、これまでの調査成果をわかりやすい形でなるべく早い時期に公開すべきである等の理由による。

第Ⅰ期整備と第Ⅱ期整備のそれぞれの方針は表2のようになる。

表2 鴻臚館跡整備方針（第Ⅰ期・第Ⅱ期整備）区分

	整備目的	整備の手法	整備対象地	実施期間
第Ⅰ期整備	1. 造構・遺物の保存（前提条件） 2. 平成4年度までの調査成果の公開 3. 体系的理解が得られる仮整備 4. 第Ⅱ期整備への足掛かりとなる実験的整備をめざす	1. 展示館の新築 2. 展示館内に礎石建物の原寸大模型の設置 3. 展示館外での3時刻の造構表示整備	平和台野球場南側 (約7,000m ²)	平成5～7年度 5年度 実施計画策定 6年度 新展示館建設 7年度 建物模型製作
	1. 造構・遺物の保存 2. 鴻臚館跡の本格的復元 3. アジア文化交流史研究の場の形成 4. 福岡城跡との一体的な史跡整備を図る。	1. 当時の材料と工法を用いた鴻臚館跡の本格的復元。 2. 研究施設等の充実 3. 造構表示の整備。		平和台野球場移転後の発掘調査を踏まえ実施する。 平成24年度前後に完成予定。

表3 鴻臚館跡調査整備事業中期計画表

年 度(平成) 事 項	3~4 年	5 年 1993	6 年 1994	7 年 1995	8 年 1996	9 年 1997	10年 1998	15年 2003	20年 2008	24年 2012	備 考
舞鶴城址将来構想											平成3年5月に提言
短期計画(10年)								(13年度)			平成7年度完成
鴻臚館跡第1期整備											
三ノ丸庭園											
{ 4・5号濠											
潮見櫓・花見櫓復元											
下の橋復元											
中期計画(20年)											
二ノ丸御花島											
{ 鴻臚館跡本格的復元整備											
大手門復元											
上ノ橋復元											
6号濠											
城内施設移転事業											平成6~9年度 国立病院跡地購入
鴻臚館跡調査整備計画											
発掘調査	第1期調査 (旧テニスコート部分)										昭和62年~平成4年度 第1期整備対象地
	第2期調査 (西広場部分)										
	第3期調査										
	第4期調査(野球場南半)										
	第5期調査(野球場北半)										
整備	第I期整備(仮整備)										球場南側の仮整備
	第II期整備(本格的整備)										第4・5期調査成果を踏まえた本格的整備
											(基本構想→完成まで10年計画)

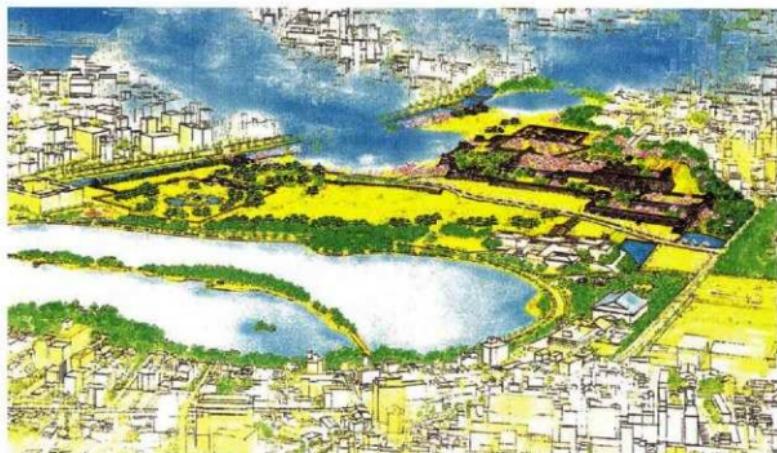


図12 舞鶴城址将来構想イメージ図

III 第Ⅰ期整備計画

1. 第Ⅰ期整備の組織と構成

第Ⅰ期整備は鴻臚館跡調査研究指導委員会の指導を受けながら、下記の体制で実施した。

(1) 鴻臚館跡調査研究指導委員会の構成

委員長	東京女子大学名誉教授	平野邦雄 国史学
副委員長	九州大学名誉教授	横山浩一 考古学
委員	大阪府文化財審議会センター課長 前奈良国立文化財研究所所長 奈良国立文化財研究所所長 福岡県文化財審議会委員 九州歴史資料館副館長 九州芸術工科大学教授 瑞穂短期大学教授 京都造形芸術大学教授 工学院大学教授	坪井清足 考古学 鈴木嘉吉 建築史学 田中琢 考古学 渡辺正氣 考古学 石松好雄 考古学 杉本正美 造園学 澤村仁 建築史学 中村一 造園学 渡辺定夫 都市工学
		小田富士雄 考古学 福岡大学教授 西谷正 考古学 岡山大学教授 狩野久 国史学 川添昭二 国史学 笠山晴生 国史学 八木充 国史学 佐藤信 国史学

(2) 平成5・6年度の体制

調査・整備主体	福岡市教育委員会教育長	尾花剛
整備総括	文化財部長	後藤直
庶務担当	文化財整備課長	古西憲輔
	管理係長	後藤晴一
	管理係	菅原善則 林国広
調査・整備担当	文化財整備課主査	田中壽夫
	文化財主事	瀧本正志
展示館設計協議・施工管理	福岡市建築局營繕部營繕課	橋原正大
館外造構表示設計・施工管理	福岡市教育委員会施設部用地課	松本伸三郎
展示館設計	株式会社志佐設計	代表取締役 志佐幾範
展示館施工	古松建設株式会社	代表取締役 吉松修
展示館電気・消防設備施工	共博電気商会	代表取締役 森上弘次
展示館給排水設備工	有限会社山田設備設計事務所	所長 山田末男
展示設計・施工	株式会社ケンラン社	取締役社長 金子寿和
復元建物・模型設計	株式会社京都科学	取締役社長 宅間茂
館外造構整備設計	財團法人九州環境管理協会	理事長 高島良正
館外造構整備施工	株式会社愛廣園	代表取締役 吉賀広記

(3) 平成7年度の体制

整備主体	福岡市教育委員会教育長	尾花剛
庶務担当	文化財部長	後藤直
整備総括	文化財部文化財整備課長	柳田純孝
調査・整備担当	管理係長	後藤晴一
建物模型製作	文化財部課長(史跡整備等担当) 主査	林国広 塩屋勝利 田中壽夫 宅間茂
	株式会社京都科学	取締役社長

2. 第Ⅰ期整備計画策定の経過

整備計画案から計画策定・完工までの期間は約3ヶ月を要した。その間の計画策定作業はおおむね以下のような段階的検討過程を踏まえて行われた。

(1) 整備発案および構想の段階

第Ⅰ期整備は、平成4年度第1回指導委員会において整備の方向付けがなされた。平和台野球場移転と跡地調査後の本格的整備まではかなりの時間を要することが考えられることと、展示館内の造構展示のみでは市民にとってわかりにくいといった理由によるものである。委員会では整備方針や手法についての検討を進めることと、具体的な検討を行うための小委員会設置が決定された。

これを受けた同年7月の小委員会で館外整備案(7案)について検討を行い、同年度11月30日の第2回指導委員会に、復元建物の復元イメージ案と小委員会で絞り込まれた館外の造構整備案を提示し、整備の基本的構想がほぼ確定した(19・28・34頁)。

(2) 基本計画および実施設計の段階

平成5年5月18・19日の第1回指導委員会において、整備基本方針案(表2・5)を提示し了解を受けた。整備計画策定では福岡城内の利用者の動線傾向も踏まえ、各整備項目の検討を小委員会で行うことと、展示館は建て替える方向で検討する旨の指導がなされた(19・20頁)

同年7月9日には、市民球場基本構想検討委員会から「平和台野球場の代替え球場を平成13年度頃までに建設のメドを立てる」趣旨の構想が提出され、鴨池駅跡の本格的整備に向けての中期的計画を策定し(表3)、第Ⅰ期整備完了を平成7年8月に予定のユニバーシアード大会開催前までとした。

同年9月9日の小委員会では、展示館新築案(3案)、建物模型製作案とスケジュール、館外造構整備案(3案)について検討し(21・35頁)、基本計画の絞り込みを行った(37頁)。また舞鶴公園管理者の都市整備局と所有者大蔵省九州財務局へ整備案を説明し、土地利用計画について了承を得た。

同年12月7・8日の第2回指導委員会では、展示館基本計画案と館外整備案について検討課題を残しながらも大筋で了承を得て、展示館および館外造構整備の実施設計を早急に進めることとなった。なお、整備に関する文化庁との協議を踏まえて、館外整備案のうちの東門と堀の造構表示に噴水を使用する案については実施設計の見直しを行った(38頁)。

平成6年度第1回指導委員会で各実施設計案について提示し、展示館内の造構保存の観点と造構表示上の問題について最終的な指導を受け、設計案の一部修正を行った。また復元建物模型を造構上にどう架構するか提案し、模型の重量軽減化と架構方法について検討する旨の指導を受けた。建物模型の設計は同年10月から開始し、平成6年度第2回指導委員会で素案の了承後、鈴木嘉吉氏・澤村仁氏の監修下で平成7年3月に終了した(29頁)。

こうした設計検討を経て、展示館建替工事が平成6年10月8日から、造構整備工事が同年12月10日から、建物模型製作が平成7年1月から始まった。



図13 指導委員会審議風景

表4 各整備項目実施経過概要表

整備項目	年度	5年度	6年度	7年度
整備基本方針	● 5月			
展示館建替協議	――			
展示館設計	10月	――		
展示館施工		10月	――	3月25日
造構整備設計	8月	――		
造構整備施工		11月	――	4月15日
建物模型設計		――		
建物模型製作		1月	――	7月15日
展示設計・製作		――	8月9日	

3. 第Ⅰ期整備計画の内容

(1) 計画の概要

第Ⅰ期整備は平和台野球場が撤去後の本格的整備までの当面の仮整備として計画が策定された。整備対象地は昭和63年度～平成4年度にかけて調査された野球場南側(旧テニスコート)部分である。整備面積は周囲の福岡城土塁も一部含んでおり、約7,000m²である(図54～56)。

整備計画は、展示館の建替え、原寸大の建物模型の製作設置、筑紫館から鴻臚館までの3時期に分かれる建物群の造構整備が主な内容である。これらの実施にあたっては表5に示した基本方針を前提として計画策定を行った。策定作業における問題等については整備計画の各項目別に記している。

旧展示館は、アジア太平洋博覧会の仮設のミニパビリオンとして平成元年3月に開館したもので、公開施設の充実を図ること、耐用年数、周辺景観との調和等の諸点から建替えることとした(20頁)。

原寸大建物模型の製作設置は、展示館内における展示手法の見直しという観点から、古代の建築物についてより実感しながら学べるように、昭和63年度～平成元年度調査で確認された平安時代の礎石建物を対象に、その一部について復元を試みたものである。ただし本格的な復元ではなく、9世紀半ば～10世紀代の一般的な古代建築の様式・建築技法を模型仕様で示した(図42～45)。

造構整備は、筑紫館から鴻臚館までの3時期に分かれる建物跡の変遷を平面的に造構表示したものである。整備地を東西に二分し、東側を奈良時代、西側を平安時代として時代差を表現している(37頁)。

表5 第Ⅰ期整備の概要

項目	内容															
整備実施期間	平成6年10月着工、平成7年8月10日全体完成。 5年度 実施計画策定(新展示館設計、館外造構整備設計) 6年度 新展示館建設、展示設計・製作 館外造構整備工事 建物模型基本実施設計・一部製作 7年度 建物模型製作															
総事業費	約3億3,000万円															
公開開始	平成7年8月10日(木)開館。															
整備対象地	平和台野球場南側旧テニスコート部分及び福岡城上塁の一部。															
整備面積	7,000m ² (展示館も含む)															
基本的前提条件	造構・遺物の保存を最優先させ、計画・施工において万全を期す。															
整備方針	1. 平成4年度までの調査成果の公開を行う。 2. 鴻臚館に関する体系的な理解が得られる整備を行う。 3. 第Ⅱ期整備(本格的整備)の足がかりとなる整備を行う。															
展示館	<table border="1"> <tr> <td>構造と規模</td> <td>トラス構造平野寄棟造り、床面積937.5m²、高さ約14.977m</td> </tr> <tr> <td>館内展示</td> <td>1. 平安時代の建物の一部を原寸大に復元した模型を設置。 2. 発掘調査終了の状態で造構・遺物を露出展示。 3. 鴻臚館に関する展示パネル、模型、出土遺物を体系的に展示。</td> </tr> </table>	構造と規模	トラス構造平野寄棟造り、床面積937.5m ² 、高さ約14.977m	館内展示	1. 平安時代の建物の一部を原寸大に復元した模型を設置。 2. 発掘調査終了の状態で造構・遺物を露出展示。 3. 鴻臚館に関する展示パネル、模型、出土遺物を体系的に展示。											
構造と規模	トラス構造平野寄棟造り、床面積937.5m ² 、高さ約14.977m															
館内展示	1. 平安時代の建物の一部を原寸大に復元した模型を設置。 2. 発掘調査終了の状態で造構・遺物を露出展示。 3. 鴻臚館に関する展示パネル、模型、出土遺物を体系的に展示。															
館外造構整備	<table border="1"> <tr> <td>平面区分</td> <td>東側を奈良時代のステージ、西側を平安時代のステージとし、30cmの比高差をつけ、時代差を表現。界線はコンクリート階段で示す。</td> </tr> <tr> <td>時期</td> <td>整備の内容</td> </tr> <tr> <td>第1期 造構</td> <td>東門 基壇範囲の復元・堀布掘 地業・柱跡の表示</td> <td>柱跡・堀中心線は木材で表示。東門基壇は真砂土舗装による推定範囲の平面表示。</td> </tr> <tr> <td>第2期 造構</td> <td>櫛立柱 建物</td> <td>柱穴跡・建物範囲の表示</td> <td>柱穴跡は木レンガ、建物範囲は真砂土舗装による平面表示。</td> </tr> <tr> <td>第3期 造構</td> <td>礎石建物</td> <td>礎石・基壇の復元表示</td> <td>礎石は自然石で、基壇は真砂土舗装で平面表示。(建物模型との連続性を配慮)</td> </tr> </table>	平面区分	東側を奈良時代のステージ、西側を平安時代のステージとし、30cmの比高差をつけ、時代差を表現。界線はコンクリート階段で示す。	時期	整備の内容	第1期 造構	東門 基壇範囲の復元・堀布掘 地業・柱跡の表示	柱跡・堀中心線は木材で表示。東門基壇は真砂土舗装による推定範囲の平面表示。	第2期 造構	櫛立柱 建物	柱穴跡・建物範囲の表示	柱穴跡は木レンガ、建物範囲は真砂土舗装による平面表示。	第3期 造構	礎石建物	礎石・基壇の復元表示	礎石は自然石で、基壇は真砂土舗装で平面表示。(建物模型との連続性を配慮)
平面区分	東側を奈良時代のステージ、西側を平安時代のステージとし、30cmの比高差をつけ、時代差を表現。界線はコンクリート階段で示す。															
時期	整備の内容															
第1期 造構	東門 基壇範囲の復元・堀布掘 地業・柱跡の表示	柱跡・堀中心線は木材で表示。東門基壇は真砂土舗装による推定範囲の平面表示。														
第2期 造構	櫛立柱 建物	柱穴跡・建物範囲の表示	柱穴跡は木レンガ、建物範囲は真砂土舗装による平面表示。													
第3期 造構	礎石建物	礎石・基壇の復元表示	礎石は自然石で、基壇は真砂土舗装で平面表示。(建物模型との連続性を配慮)													

(2) 整備事業費

第Ⅰ期整備の事業年度は、平成5年度～7年度の3ヶ年度である。

平成5年度は、展示館および館外造構整備の実施設計を行った。平成6年度は、展示館建替工事、館外造構整備工事等を行い、平成7年度は原寸大の建物模型の製作設置を行った。

平成6年度および7年度は、自治省地域総合整備事業「まちづくり特別対策事業」として採択され、支援措置として事業費の52.5%の充当率の起債支援を受けて、予算措置を図った。

「地域総合整備事業債」制度は、地方公共団体の創意で自由に行う単独事業に対して、実質的に1/3国庫補助と同等の財政支援が受けられるもので、一般の起債充当率よりも低い充当率のために、事業年度の一般財源所要額が大きくなるが、一般単独事業にはない元利償還費等に対する交付税措置があるために、長期的には地方公共団体の財政負担額が軽減される特徴がある。したがって、今回の鴻臚館跡の整備事業にあたって、起債支援を要望したものである。

ちなみに福岡市における選定基準は、

- ①市民が望む地域のシンボル、顕づくり、将来の財産となる事業であること。
- ②事業規模が大きく、マチづくりに与える影響が大きな事業であること。
- ③地域の特性を活かし、個性的・独創的な事業で、福岡市の都市政策を牽引する事業であること。
- ④他の制度を利用するより当制度を活用する方が有利な事業であること。
- ⑤将来にわたって財政負担の増加や市職員の増員が見込まれない事業であること。

などであり、要望にあたっては、「セントラルパーク構想の一環として鴻臚館跡の一部復元整備を行い、都市づくりの核となる文化環境形成を図り、地域文化の向上を担う」ことを目的として「鴻臚館跡復元・周辺環境整備事業」とした。なお、平成7年度に開園した国史跡板付遺跡の整備事業の一部についても「歴史と交流の広場板付史跡公園整備事業」として適用支援を受けている。

表6 鴻臚館跡第Ⅰ期整備事業費当初予算および財源内訳

事業費目	年度別	平成5年度	平成6年度		平成7年度	合計(円)
		(円)	起債対象額(円)	対象外額(円)	起債対象額(円)	
新展示館実施設計費 館外造構整備設計費	5年 度	5,000,000 7,000,000				5,000,000 7,000,000
指導経費(事務費) 復元解体・建設費 火災報知機工事費 建物模型実施設計費 展示実施設計費 館外造構整備費 展示製作費	6年 度	500,000 98,000,000 1,400,000 7,000,000 1,330,000 110,000,000 6,268,000		9,000,000		500,000 107,000,000 1,400,000 7,000,000 1,330,000 110,000,000 15,670,000
指導経費(事務費) 建物模型製作費	7年 度				500,000 77,644,000	500,000 77,644,000
小計		224,498,000	18,402,000	78,144,000		
年度別合計		12,000,000	242,900,000	78,144,000	333,044,000	

財源内訳総括表

内訳	年度	平成6年度	平成7年度	合計
		(円)	(円)	
起債額		118,000,000円 (224,498,000円×52.5%)	41,000,000円 (78,144,000円×52.5%)	159,000,000円
市・般財源額		124,900,000円	37,144,000円	162,044,000円
合計		242,900,000円	78,144,000円	321,044,000円

(3) 全体計画

1) 第Ⅰ期整備対象地の整備前状況

整備対象地は、福岡城三ノ丸東南隅郭に位置している。

江戸時代にはこの地は黒田藩家老職を務めたこともある大音家の屋敷地である。廃藩置県後旧陸軍に接収されて、第24連隊の弾薬庫、被服庫として利用された。福岡城土塁の一部は弾薬庫建設の際に、防風堤として改変を受けている。戦後は、昭和23年～32年にかけて建築された平和台野球場、外周管理道路、テニスコートとして利用された。鴻臚館関連遺構は、この際の工事による破壊が最も顕著である。

昭和63年度からの発掘調査開始時には、テニスコートの他便益施設としてトイレ、更衣室、観戦席、休憩用藤棚などが設けられ、周囲にはネットフェンスが巡っていた。明治期以降のこれらの諸施設は函面上に記録化した後に除去した。鴻臚館関連および江戸期の遺構と遺物の一部は、将来の再調査と整備に備えて保存上のしかるべき处置（盛土）を施した後に調査終了後埋め戻し更地とした（図14）。

2) 周辺の環境

第1章で述べたように、鴻臚館跡がある福岡城跡は福岡市都心部の天神から西へ約1km離れた地点に位置している。周辺は土地の高度利用が進み、中層～高層ビルが林立している中において唯一豊かな緑が残る環境となっており、都市公園法に基づく風致地区にも指定されている。またこの地は油山から博多湾に向かって延びる緑地と博多湾岸に沿って点在する公園緑地との交点ともなっていることから、セントラルパークとして位置づけられており、現在その構想の実現が推進されている。

この福岡城跡は舞鶴公園と一般には呼ばれており、休日になると市民の散策、憩いの場として親しまれている。隣接する文化施設には、福岡市美術館、日本庭園、県立能楽堂などがある。またスポーツ施設として、平和台陸上競技場、平和台野球場、球技場、テニスコート等があり、本市のスポーツ振興の一翼を担ってきた。これらの諸施設を含んだ公園の年間利用者は、昭和63年度の統計資料では約230万人（有料施設利用者175万人、プロ野球観戦者55万人）である。利用者が多いのは、この地が都心部に隣接していることと共に、地下鉄やバス等の公共交通の便が良いことにもよる。



図14 整備前現況（北東から）



図15 整備前現況と周辺（北西から）

表7 旧展示館入館者数年度別動向

年 度	入館者数	備 考
昭和63年度	15,653人	16日間
平成元年度	113,937	よかトビア開催
〃 2 年度	46,725	
〃 3 年度	41,216	
〃 4 年度	37,869	
〃 5 年度	28,581	
〃 6 年度	0	新築工事のため休館

表9 推定年間利用者数（昭和63年）

場 所	利 用 者 数
舞鶴公園	約175万 (有料施設利用者数を含む)
	約55万人 (プロ野球観戦者)
大濠公園	約310万人
合 計	約540万人

表8 調査日別利用者数（昭和63年）

場 所	9月13日(火)	9月18日(日)	11月13日(日)	11月15日(火)
舞鶴公園	4,284	4,946	10,023	4,329人
大濠公園	8,608	14,416	15,593	7,154人
合 計	12,892人	19,362人	25,616人	11,483人

2) 全体ゾーニング計画

鴻臚館跡の整備計画策定にあたって、舞鶴公園内の利用者動線を検討した。資料は「舞鶴城址将来構想」作成際の調査資料を参考とした。舞鶴公園利用実態調査は、昭和63年9月13日(火)、18日(日)、11月13日(日)と15日(火)の7時~19時の間、舞鶴公園と大濠公園において計4回実施された。調査内容は利用者数、利用の形態、目的、頻度、将来整備の要望である。

利用形態等の調査結果は省くが、4日間の利用者の公園内での動線は図16のような傾向である。

すなわち、東西軸、南北軸を中心に二ノ丸およびその周辺施設等に広がっている。東西軸は主としてジョギング利用者、周辺市民の散歩、通過利用者が多い傾向があり、市民の定番となっているコースである。一部には、近接する地下鉄等の公共交通機関の利用者も含まれている。これに対して、南北軸は、城内を南北に走る道路に沿って、主に美術館・陸上競技場・平和台野球場への利用者の移動を示している。交通手段は駐車場配置の関係からマイカー利用者も多い。

これらの傾向を踏まえて、今回の整備対象地では、主として東西軸の赤坂・大手門方面および美術館・大濠公園方面からの利用客の導入を配慮し、整備地の北面を正面として、展示館入口をメインゲート、館外造構整備部分の東側隅と南北隅をサブゲートと位置づけ、整備地内の動線検討の基本要素とした。

なお、鴻臚館跡の南側(通称けやき通り)からの利用を促すための案内板の設置や入り口部分の整備を図る必要性が考えられたが、これについては福岡城跡の全体的な整備計画において配慮すべき内容であるために、将来の周辺環境整備の課題とした。

次に、整備地の動線概念は図17のように考えた。今回の整備の3つの要素である展示館内復元建物模型と露出展示部分、館外の整備された表示造構、継続して実施されている発掘調査現場をどのように有機的に結びつけるかを概念的に図化したものである。この概念図を具体化したもののが図18である。

整備地は展示館内をのぞいて基本的には自由動線とし、

3ヶ所の入り口から自由に出入りができるものとした。誘導的な動線ではないために動線概念図のとおりに利用者が動かない場合もありうるが、展示館を起点として、「鴻臚館の概要を知る」→「露出展示造構を見学する」→「原寸人建物模型から当時の建築様式と規模を実感する」→「館外の表示造構から施設の広さと建物の変遷を知る」→「整備地全体を鳥瞰する」→「発掘調査現場で調査のようすを見学する」といった段階的な知的体験を利用者が得られることをめざした。

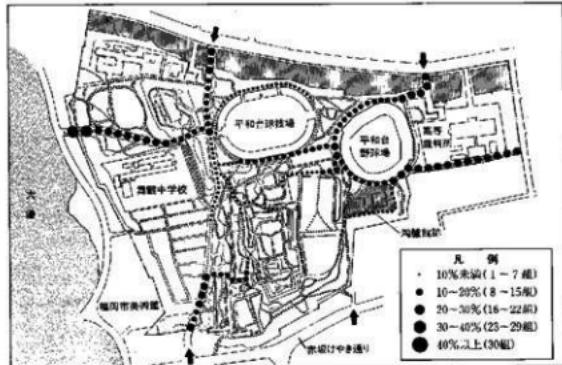


図16 舞鶴公園(福岡城跡)内利用者動線図



図17 動線概念図

主たる整備対象地	展示館ゾーン	造構展示ゾーン	調査が終了したままの造構と遺物を見学し、鴻臚館について知る。
	復元建物模型ゾーン		復元された建物模型を通して、鴻臚館の時代の建築技術や様式を知る。
	造構表示ゾーン		奈良時代から平安時代の四百年間の建物施設の規模と移り変わりを知る。
	憩いの広場ゾーン		お弁当を広げたり、昼寝をしたりしながら、ゆっくりとくつろぐ空間。
	メインエントランスゾーン		展示館と造跡公園の主たる入口であり、鴻臚館を知る起点でもある。
	サブエントランスゾーン		造跡公園への入口であり造跡公園の景観上のポイントとなるところである。
その他	展望散策のゾーン		整備された鴻臚館跡、福岡城跡石垣、祈念橋などを展望しながら、歴史に思いを巡らす。

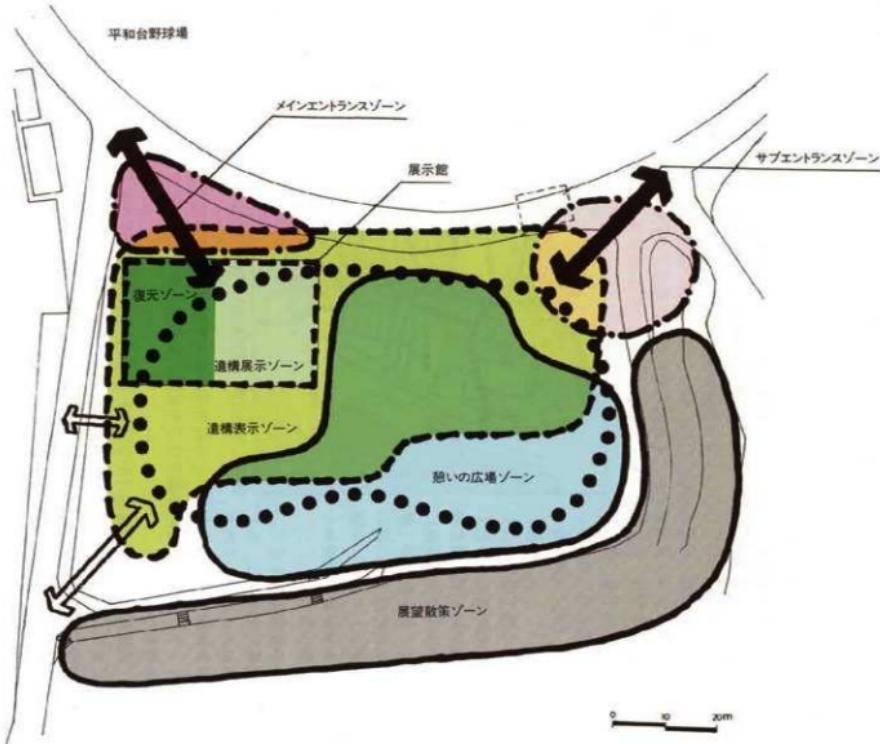


図18 整備地内における動線およびゾーニング計画

(4) 展示館建替計画

1) 建替に至る経緯

旧展示館(図19)は、平成元(1989)年3月に開催されたアジア太平洋博覧会において、鴻臚館の遺構・遺物を発見時の姿で展示公開するために建設された仮設建物であった。展示にあたり、露出したまま展示することから、遺構・遺物の保全のために鉄骨トラス構造の覆屋を設置し、建物基礎・見学者用通路は遺構上に厚さ60mm程の砂等による盛土を行ない建築した。当初の設置期間は博覧会期間の6ヶ月間であったが、博覧会開催中の入場者数が10万人を超える反響や、継続展示の要望から設置期間を延長することとなり、1990年度には常設施設となつた。その後、年間4万人前後の入館者を数え、福岡市を代表する観光施設の一つとして定着していた。

しかしながら、1992年以降は屋根、壁などに傷みが進行し、随時補修を行っていた。また、6ヶ月の予定期で設置されたので、建物の骨格材の大半は中古品が使用され、建物の耐用年数も明確にしがたい状態であった。

1993年の整備計画策定の中で、展示館内に設置する建物模型を棟も含めた完全な形で設置することに決定したが、建物模型を原寸大で設置するためには展示館の屋根を高くする工事が求められた。このため、表11に示す改築と建替の3案を検討することとなつた。



図19 旧展示館

表10 旧展示館建物概要

基礎	コンクリートベタ基礎
本体構造	鉄骨立体トラス構造 平屋造り 箱形
延面積	880m ²
屋根壁仕様	折板葺き
色調	ベージュ
建物高	7.071m

表11 新展示館建築案対比表

(工事期間はいずれも2カ月を予定)

案	工事概要	工事内容			利点・問題点		
		外観	規模	平面形	天井高		
A 案	改築：現況建物に1スパン(2.8m)の壁を織ぎ足し、屋根を高くする。 建物骨格：立体トラス(屋根・柱)	箱形	床面積：880m ² 最大長38m 最大幅28m	不整形	7.2 1 8.6m	<ul style="list-style-type: none"> ・現況建物の骨格部材も引き続き使用するので建物の耐久性が均一でない。 ・外観が周辺の景観と著しく調和しない。 ・通路部分をトラスが占め、活用面積が狭い。 ・他の建築案に比べて安価である。 	
	建替：建物を撤去し、同位置に同型で屋根を高くする。 建物骨格：立体トラス(屋根・柱)		床面積：880m ² 最大長38m 最大幅28m		7.2 1 8.6m		
	建替：建物を撤去し、ほぼ同位置に家型で屋根を高くする。 建物骨格：角パイプ(柱) 立体トラス(屋根)	家形(和風)	床面積：912m ² 長36m 幅24m	長方形	5 1 10.5m		

検討の結果、下記の理由によりC案を基本案として採用することに方針決定した。

- 耐用年数からみて2000年までに建替えの必要があり、建替えた方が長期的に見て経済的である。
- 建物模型や館外の跡跡整備をとおして、鴻臚館に対する理解を深めるために、展示の充実を図る必要があり、そのための専用の展示スペースが必要である。
- A、B案は見学者用通路が狭く、骨格部材のトラス鋼管が通路側に露出しており、多数の見学者が入場したときにゆとりが無く、安全性に問題がある。
- A、B案は外観が倉庫のようで、恒常施設として周囲の福岡城跡との景観を損なうものである。
- 建設費用の差が、3案において大きな違いを見せない。

2) 新展示館の設計

a. 基本方針

新展示館には、覆屋としての機能の他に、遺跡の理解を深めるための館内展示と建物模型、館外の遺構整備の三つの要素を一体化させ、体系的に鴻臚館が学べる施設としての機能を求めた。さらに旧展示館の問題点を踏まえ、下記の基本方針を策定した。

- ①地下造構への影響を少なくする。
- ②福岡城跡との景観的調和を十分に配慮する。
- ③展示の充実とゆとりある見学ができるようにする。
- ④館外の整備と館内の展示との連続性が判るようにする。
- ⑤耐用年数は、第Ⅱ期整備完了までの20年を見込む。

b. 平面計画

新しい平面計画には、遺構展示範囲を変更しない点や地下造構への影響を少なくする等の制限の中での、動線計画の処理、展示・見学用通路の確保、館外の遺構整備とのバランスや連続性の具体化など5項目の検討課題があった。

- ①旧展示館位置を基準に、長方形の平面形とする。
 - ・旧展示館の南西張出し部分を除き、北東部を矩形に拡張する。
 - ・床面積の88%は旧展示館部分が占める。
- ②館内の遺構展示範囲は変更しない。
 - ・遺構保存のために新たな掘削をしない。
- ③展示スペースを確保する。
 - ・展示館の北東部を矩形に拡張し、壁のトラスを無くし、275.7m²の展示スペースを確保する。
- ④ゆとりある見学用通路の確保。
 - ・旧展示館では通路幅は1.5mであったが、通路幅2.4mを確保する。
 - ・館外の遺構展示と内部展示とのスムーズな動線処理や視覚的一体化を図る。
 - ・動線計画に基づき、北西部に受付、南部と東部に出入口、西部に緊急・資材搬入用口を設ける。
 - ・館内と館外との遺構展示が連続していることや、パネル・模型と館外の遺構とを対比できるよう、南部と東部に見透しが可能な広い開口部（出入口、窓）を設置する。
 - ・建物模型を当時と同じHの高さで見られ、実感できるように2か所に階段、踊場を設ける。
- ⑤受付、管理人室の設置。
 - ・展示館北東部に管理人室を設置した。面積はこれまでの7.2m²から16.5m²に広くした。

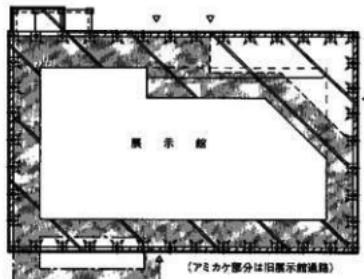


図20 新旧展示館平面形比較図

c. 外観の設計

展示館の外観は、和風建物とする決定を受け、切妻、寄棟A、寄棟Bの3案を素案として（図21）、デザインの検討を行った。展示館には、西側に福岡城二ノ丸石垣が迫り、移築した祈念櫓や天主台石垣を臨める位置に立地しており、福岡城跡との景観の調和、さらには造構表示した環境整備のイメージを高めるものにする必要があった。また、野球場撤去後には、展示館建物がランドマーク的存在になることも考慮し、寄棟B案に決定した。

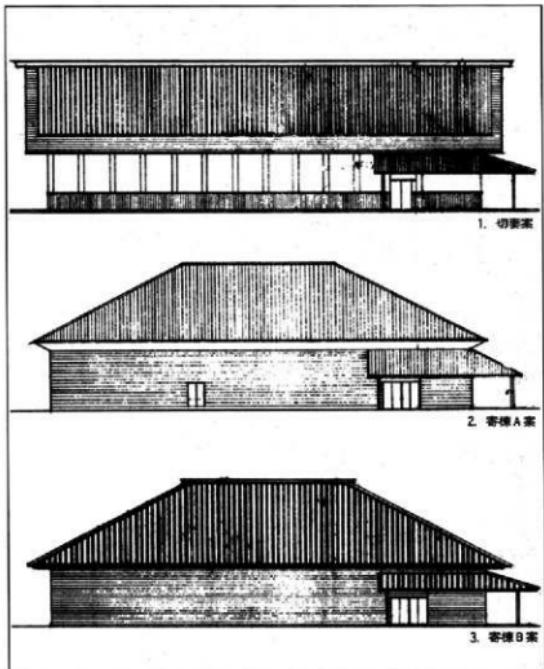


図21 展示館建設外観案比較図

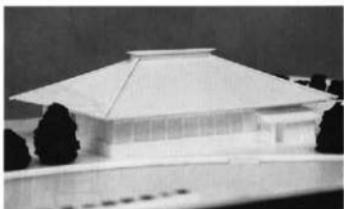


図22 寄棟B案模型

さらに、古建築のイメージを加えることとなり、設計案(図23)になった。しかし、雨水処理、庇構造、光量、メンテナンス等の問題を検討した結果、図24に変更した。

- ①古建物をイメージするものの、遺跡に関係するもの(復元建物)と混同させない。
- ・柱は丸柱(径40cm)、柱間を3mとして、一般的な古建築(寺院講堂)のイメージを持たせた。
- ・屋根は本瓦葺風の円筒葺き(径14cm)とし、軒先は軒丸瓦に見立てて円形蓋を付けた。
- ・壁は板張りに見立てた折板横張(幅30cm)とした。
- ・壁には疑似梁、高さ1.2mの腰壁、格子窓に見立てた縦型ガラリを配置した。
- ・屋根勾配は、母屋を5寸、庇を4寸とし、安定感を出すとともに、木造建物風を図った。
- ・下棟に反り(R:200m)を持たせ鋼材使用に伴う硬質感の軽減、木造建物風を図った。
- ②外観全体のバランスに考慮した。
- ・軒出が3mの庇を出して安定感を図った。
- ・幅1.5mの棟飾を設け、建物の重厚感を持たせた。
- ・屋根の途中に大型箱樋、庇先に軒樋を設け、呼樋で1本化して内樋として日立たなくした。雨水を軒樋だけで処理する場合は大型軒樋の設置が必要となり、デザイン的に重量感があり過ぎるとともに、古建築のイメージを損なうために、屋根の途中に大型箱樋を設置した。その結果メンテナンス用通路も兼ねることが可能となった。

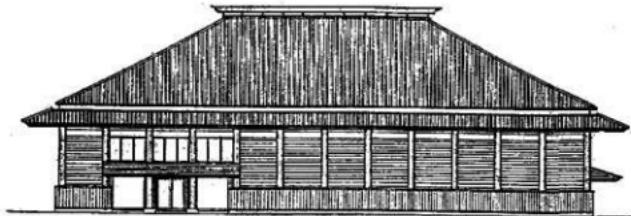


図23 設計当初案

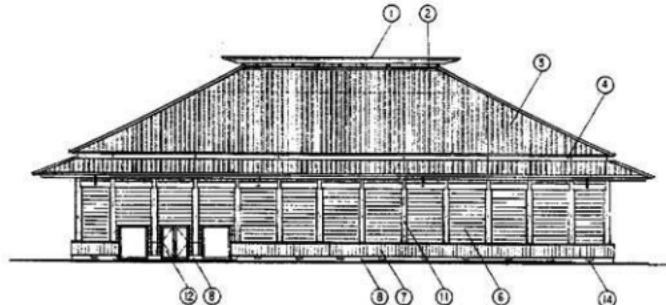


図24 設計最終案

d. 繪造計圖

屋根の構造は、既存と同じ『立体トラス構造』とした。壁の構造は既存は立体トラスであるが、展示空間を有効に取るため『柱立ち』とし、復元模型の高さから、軒の高さを床面より6.3mとした。仕上げ材も軽量化のため外部を鉄板葺きとし、内部仕上げは一部のみとした。

基礎の設計については造構への影響を第一とし検討を重ねた。まず建替え位置が既存と重なるため、既設基礎の再利用を検討した。柱立ち構造とするための柱脚固定が可能な基礎を作る、既設基礎はそのままにし、その上に柱からの加重を処理するのに必要な厚さ50cmの露出型のコンクリート独立基礎を設ける事とした。その部分は新設基礎の73%にあたり、他の造構より+10~30cmまで根切りを行った。造構への負荷は上部加重+基礎加重で $3 t / m^2$ となる。柱間は3mを基本とし、13スパン×8スパンの架構とした。

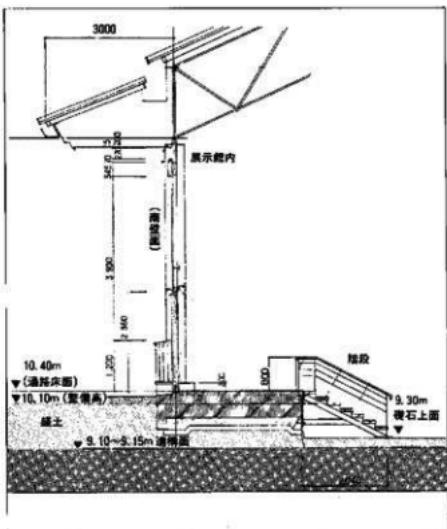


圖25 展示館基礎構造斷面圖

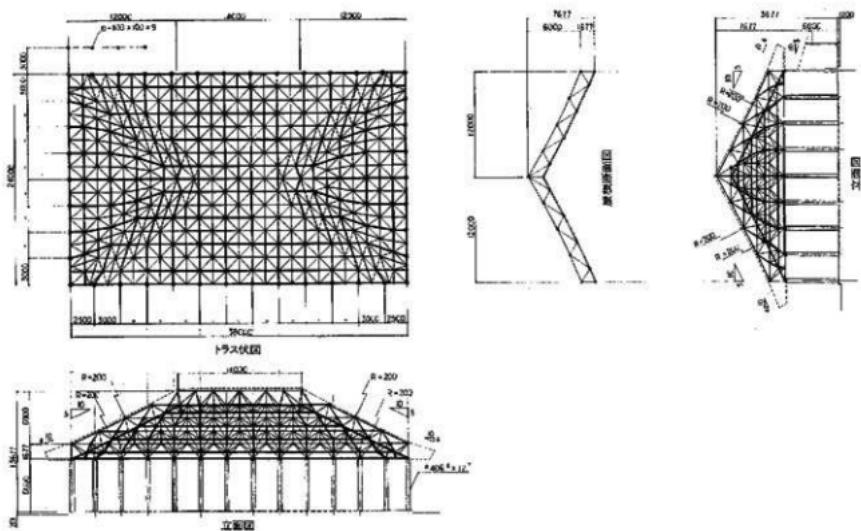


図26 建物構造図

e. 色彩計画

大きく展示館内部と外部とに分かれる。内部は、天井がないために建物構造材が露出することから、圧迫感を感じさせないようにするとともに、建物空間の広がりを感じるようにした。外部は、展示館が風致地区内に立地することから、条例に規定された色調で選択する必要があった。さらに、石垣や緑豊かな景観と合致しながら、道路の建物を復元したものと誤解を招かないように配慮し、表12のような色彩計画とした。

表12 使用色一覧

箇 所	色 番 号	見 本 色
屋 根	DIC C-228	
軒先腰板 腰板の一部	DIC C- 39	■
ト ラ 斯、柱	DIC C-232	
模擬染、腰壁 内壁、間柱 耐候、手摺 外壁、軒天井	DIC C-144	■

f. 造構保全計画

造構展示においては、苔、カビ類の発生（高温多雨期）、乾燥による風化（夏季、冬期）が問題化していた。このため、造構保全の方法として、①周囲からの水の滲み出しの隔絶、②通風の改善を図るなどの指導を奈良国立文化財研究所肥塚隆保主任研究官から受けた。また、大きな要因である太陽光の量を少なくするために、他の計画との調整に配慮した。

①太陽光による造構への影響を少なくする。

- ・館外の造構整備との連続性や消防法との関係から窓や出入口の広さには制限があり、完全に太陽光照射を無くすることはできないが、開口部を最小にして太陽光照射量を少なくした。

②開口部のガラスを有色にし、紫外線遮断シート（遮断率85%）を張り、太陽光照射量を押さえた。
③湿気、温度に十分配慮する。

- ・自然換気を基本とし、床面外壁に通風口、建物軒下と棟に縦型ガラリを設置して、スムーズに館内の空気が下から上へ流れるようにした。ガラリの開口率は、棟部は台風時などを考慮して34%、軒下部は50%である。

g. 防災計画

展示館本体は不燃物であるが、復元建物模型や展示部門には可燃性の材質が使用されることから、火災、地震等の非常事態が生じたときは、まず入館者を安全・迅速に館外へ避難・誘導する必要がある。このため、消防法の規定に従った設備を設置するとともに、管理人室に情報、操作機器を集中させて事態の速やかな把握と的確な対応ができるようにした。

①入館者の安全な避難ができるようにする。

- ・展示館の7ヶ所に非常出入口と誘導灯を設けた。
- ・非常用放送設備を設置した。

②事態の速やかな把握と的確な対応を取れるようにする。

- ・管理人室に総合操作盤を設置した。
- ・火災感知方式としては空気管式を採用し、天井のトラスに空気管を設置した。

③消防設備の設置においても景観や造構に配慮する。

- ・消火栓は、防火水槽設置のために大規模な掘削が必要であり、施設規模が大きくなるために設置しなかった。

表13 消防用設備

火災感知方式	空気管式（天井面）
火災報知機	4ヶ所
非常出口	7ヶ所
誘導灯	7ヶ所
消火器	3型4ヶ所
非常放送設備	スピーカー12ヶ所

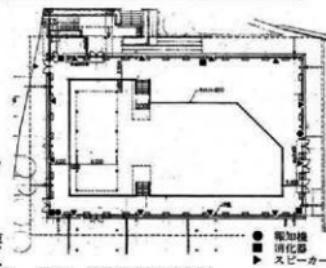


図27 消防設備配置略図

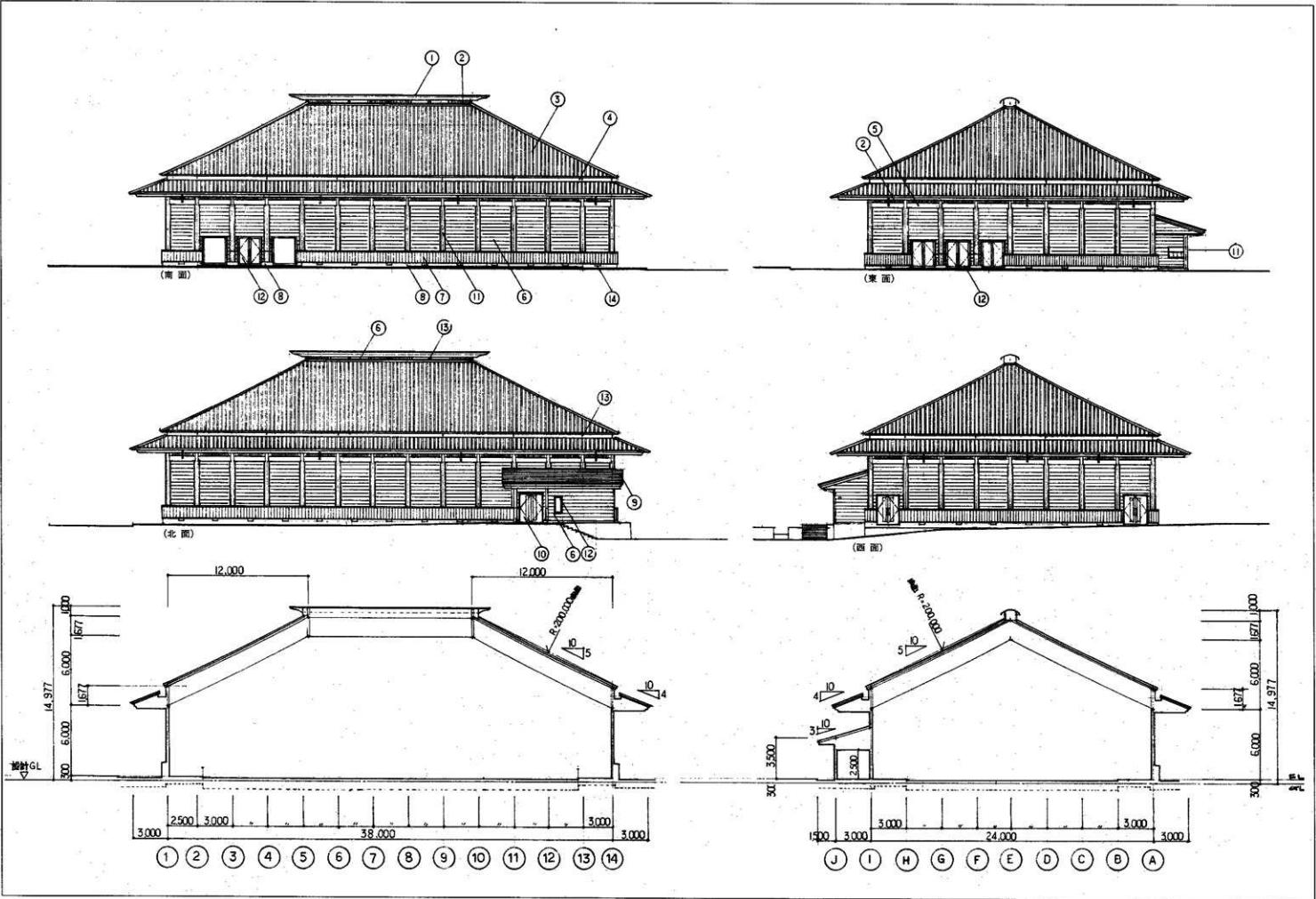


図28 海牀館跡展示館正面および側面立面図

表14 展示館建築概要

■建築概要		■構造概要	
・建築物高	最高の高さ 14,977m 軒の高さ 6.3m	・主要構造 ・基礎 ・構造材料	鉄骨造平屋建 独立基礎 柱：鉄骨（径406mm） 屋根：鉄骨立体トラス パイプ径48.6～101.6mm グローブ径85～260mm (エポキシウレタン塗装)
・面積	建築面積 1,188.75m ² 延べ面積 937.5m ²		
■外部仕上			
・輪棟	亜鉛鋼板 厚3.2	フッソ樹脂塗装	
・軒裏	亜鉛メッキ鋼板 t=0.6		
・軒先鋼板	亜鉛メッキ鋼板 t=0.8		
・呼び樋	カラーV.P管 径75		
・縦樋	カラーV.P管 径75		
・屋根	本体の屋根：折板亜鉛メッキ鋼板（円筒瓦） t=0.8 径140 @30 反りR=200m 指定色 管理人室の屋根：亜鉛メッキ鋼板（-文字瓦） t=0.4		
・箱樋軒樋	耐候性被覆鋼板 t=0.6		
・外壁	折板亜鉛メッキ鋼板 t=0.8	横張（大和瓦） @300	
・腰板	折板亜鉛メッキ鋼板 t=0.6	縦張 @200	
・縁木	コンクリート打ち放しの上リシン吹付		
・柱型	亜鉛メッキ鋼板 t=0.8	（裏貼：無機質ガラス織維）	
・模擬梁	亜鉛メッキ鋼板 t=0.8		
■内部仕上			
・展示室	床：コンクリート金こて仕上 幅木：コンクリート金こて仕上 壁：鉄骨カラー清止め塗装表し (一部無石綿珪藻カルシウム板t=6の上にE.P塗装) 天井：立体トラス表し		
・管理人室	床：コンクリート金こて押さえの上にPタイル直貼 幅木：ソフト幅木H-60 壁：石膏ボードt=12の上にE.P塗装 天井：化粧石膏ボードt=12		
■設備概要			
・電気設備	照明コンセント設備（非常用照明を含む）		
・機械設備	給排水設備（管理人室のみ） 給湯設備（管理人室のみ） 空調換気設備（管理人室のみ） 自動火災報知機（空気管方式） 非常用放送設備 誘導灯、消火器		

(5) 展示計画

旧展示館においては北正面入口周辺と南側見学用通路壁面に説明パネルと若干の遺物を展示していた。通路が幅1.8mしかなく、出土遺物を通路部分に保管していたこともあって、見学には不便な面があった。新展示館は、見学用通路がより広く確保できることから、展示面積は約2倍の275.7m²に拡張できること、原寸大の建物模型を設置すること、また建物模型を身近に見学できる階段を2ヶ所に設ける等の新たな展示要素が付け加わることとなったために、展示館の建替に伴って展示内容を下記の基本方針および計画の下で一新することとした。

1) 展示方針

- ①展示基本テーマを「鴻臚館とは」とし、鴻臚館に関する体系的な展示内容とする。
- ②展示は造構露出展示部分と壁面展示部分に分け、展示主体を建物模型と造構露出展示部分とする。
- ③造構露出展示部分では、発掘調査が終った状態の造構と遺物を見学できるようにし、また原寸大建物模型を設置して、当時の建築様式と技術・規模を実感できるようにする。
- ④壁面展示は、動線計画に従いテーマを設定し、テーマ毎のコーナーを設ける。
- ⑤展示内容の段階的な充実を図るために、今後5ヶ年の計画を検討する。

2) 展示計画

- ①館内展示は表15に示した275.7m²について検討する

②動線計画

整備地内動線計画と整合性を持たせて館内の動線計画を作った。基本的には、「鴻臚館の概要を知る」→「調査したままの造構展示を見学する」→「原寸大の建物模型から当時の建築様式と規模を実感する」→「館外整備で施設の変遷を知る」という流れに沿って利用者を誘導するものとした。

表15 新旧展示館展示面積比較表

	建築面積(m ²)		展示面積(m ²)	
	旧	新	旧	新
展示館床面積	880.0	937.5	—	—
造構展示部分	—	—	538.4	492.8
建物模型	—	—	—	164.7
館内通路	341.6	444.7	130.0	275.7
展示用壁面	100.0	252.0	98.3	226.8

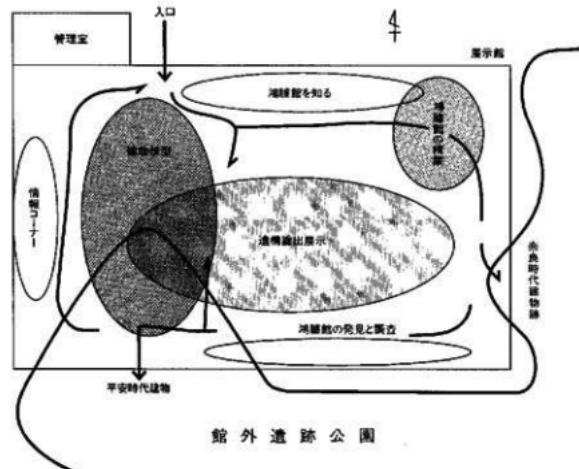


図29 展示館ゾーニングおよび動線概念図

③ 造構露出展示部分（展示面積は約492.8m²）

鴻臚館跡の原資料としての造構を展示館の主要展示とし、当時の建築物の規模と様式等の理解を深めるために原寸大の建物模型を展示する。

④ 壁面展示部分の計画

通路壁面の利用して、通路延面積444.7m²のうち275.7m²部分を展示対象部分とし、壁面展示を主とした展示計画を策定した。壁面展示面積は226.8m²である。

展示説明にあたっては、各コーナーにテーマを設定し、それぞれにテーマカラーを設定した（図80）。

・コーナー1（コーナーテーマ「鴻臚館」鴻臚館の概説）

1. 市長挨拶文の中で鴻臚館跡第1期整備の経緯、今後の本格的整備について述べる。

2. 鴻臚館の時代、筑紫館から鴻臚館までの変遷、鴻臚館の役割と機能を説明する。

3. 鴻臚館の地理的位置については、当時と現在の景観の対比ができるようとする。

4. 筑紫館から鴻臚館までの歴史的背景についてイラスト入りの年表を掲示する。

・コーナー2（コーナーテーマ「鴻臚館の成り立ち」律令制度下の鴻臚館、筑紫館から鴻臚館へ）

1. 中テーマに、1) 大宰府と鴻臚館、2) 筑紫館と鴻臚館を設定する。

・コーナー3（コーナーテーマ「鴻臚館の精華」出土遺物から鴻臚館の汎世界性を知る）

1. 中テーマに、1) 交易を物語るもの、2) 陶磁器の道を設定する。

2. 遺物は中国産陶磁器を中心に約100点を展示し、また遺物出土状況レプリカを展示する。

・コーナー4（コーナーテーマ「鴻臚館と遣唐使」遣唐使の概説）

1. 遣唐使の渡航目的と構成、航路について絵図で説明する。

・コーナー5（コーナーテーマ「鴻臚館跡の発見と調査」鴻臚館跡の解明の歴史とその成果を知る）

1. 故中山平次郎博士の人となりと、鴻臚館跡福岡城内説を紹介する。

2. 奈良時代のトイレ遺構出土遺物と東門と堀の基礎部分の土層剥ぎ取りパネルを掲示する。

・コーナー6 情報コーナー

1. 福岡市および周辺の博物館等施設の紹介、ポスター等を掲示し利用者への情報提供を図る。

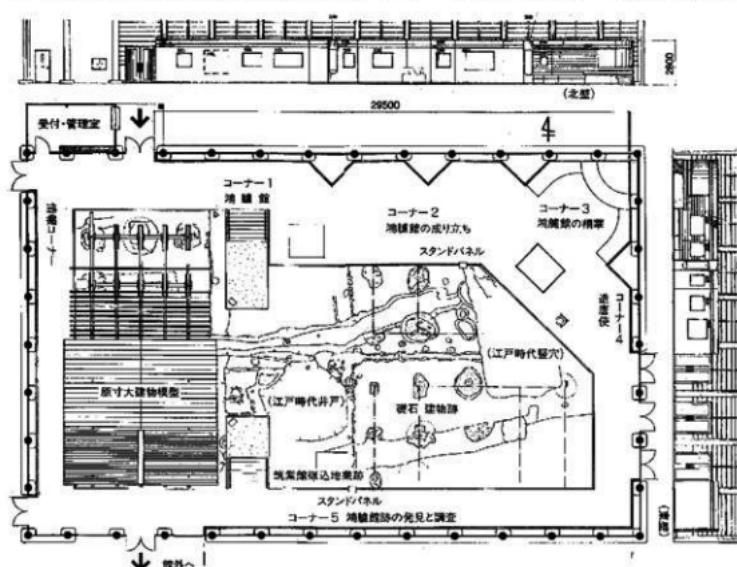


図30 展示館展示平面図および立面図

(6) 建物模型製作計画

①計画に至るまで

旧展示館内では、二棟の南北棟建物の基壇（図31）や遺物出土状況を露出展示し、各遺構には題籠や遺構写真に柱や礎石を描いた解説パネルを設置していた。見学者は遺構と遺物の出土状況には高い関心をしめすものの、公園の範囲が建物の一部だけであったことや、建物の基壇部などには礎石や縁石の大半が残っていないために、全体像や本来の建物の配置・構造については理解しにくい状況であった。このため、鴻臚館跡の全体像をより理解しやすいように、平成2年に澤村仁氏が作成した鴻臚館想像復元案（図32）を基にしながら建物跡の展示手法の検討に着手した。設置計画の検討は、指導委員会内に小委員会を設置し、基本方針を①展示遺構を理解しやすくする。
 ②遺構への影響を与えない。
 ものとした。

②基本構想

基本構想は、基本方針を踏まえ、建物遺構の範囲と展示手法を検討した。対象とする範囲は、平安時代（第Ⅲ期）の二棟の南北棟建物のうち、西側に位置する回廊状または子房の建物を対象（図33）とした。西側の建物に決まったのは、以下の3点の理由による。
 ①建物の桁行、梁行の規模が明らかである。
 ②西側の建物は遺構展示範囲に両側柱筋まで含まれ、建物の全体構造を示すことができる。
 ③東側建物にした場合は、建物規模などにより建物の一部に復元が限られる。

展示手法としては、礎石上に柱を吊り下げる案、軽い素材を用いて遺構上に浮かせて建物を復元し、礎石がない箇所は透明な材料で復元して根石が判るようにする案が提案された。その結果、軽い素材を用いた建物を復元する案を採用し、イメージ図（図34）に示した検討案を提示したが、建物模型の設置目的の「建物跡の理解を容易にするため」とは反して、展示館の屋根が支障となり、棟まである建物が復元できないことが明らかとなってしまった。このため、棟までの完全な建物復元が、建物跡の理解を容易にさせるとともに、古建築が実感できる最良の展示手法であるという観点から、展示館建物の屋根を高く変更して、棟まである建物模型を設置することとなった。



図31 旧展示館内遺構展示状況

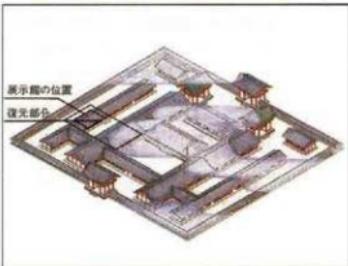


図32 鴻臚館想像復元図（澤村仁氏作）

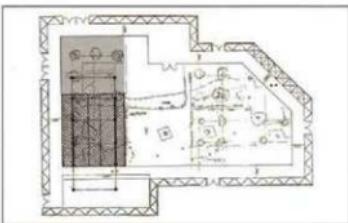


図33 建物復元対象範囲



図34 復元建物イメージ図（素案）

3) 基本計画 (平成6年)

「本物の建物跡（遺構）を見せることを第一義として、平安時代の原寸大の建物模型の設置は建物跡の理解を容易にするための展示手段」と位置付け、

①窓や瓦の葺き方など古代の建築が実感できるような実験的復元を行う。

②軽い素材を使用し、遺構上に浮かせるようにして遺構に何らかの影響を与えない。

ことを建物模型製作と設置にあたっての基本条件とした。基本計画は建物復元計画と建物を支える基礎（土台）部分とに分けて検討を行った。

a. 建物の復元

建物の復元は、発掘調査による基礎資料に制約があつたことと、時間的な制限があったことから、平安時代における建物の一般的な建築様式を実感できる建物を造ることにした。復元対象の建物は、梁行二間×桁行三間を一房とし、宿房的性格を有するという想定のもとに、現存する平安時代の古建築資料に裏付けられたものである。建築の設計にあたっては、澤村仁、鎌木嘉吉両委員の監修で進めた。

・表現計画

建物の建築段階の表現は、当初は図36の上段間に示すように計画していたが、建物の構造や組立ての過程、さらには館外整備の建物基壇との連続性を示す必要から、柱の立上げだけの状態から瓦まで葺いて完成するまでを段階的に示す図36の下段の形に変えた。

①展示館入口側から柱に斗までを乗せた段階、②棟桁まで架けた段階、③垂木架、連子窓中柱の取付、壁塗りの段階、④屋根に瓦を葺いている段階、⑤建物が完成した段階。

ただし、基壇部は中央部北寄2間の範囲で行う必要が有るために、完成した建物部分と基壇との位置が異なることになった。これは後述するたわみ防止のための基礎工法のつごうによる。

塗装（朱色・緑色・黄色）する範囲は建物の完成した範囲とし、未完成部分は白木のままとした。内部については、建物が宿房的性格である想定に従い頭貫までとした。色の選定は、既存建築や古建築復元での使用例を参考にすることにした。

建物の正面と背面とでは機能や用途が異なっていると考えられることから、背面連子窓の取り付け位置を高くし、縦寸法を正面より短くした。

当時の建築技術や木工技術を示すことは古建築を正しく理解する上で欠くことができないことから、建物の完成した範囲の部材（塗装した部材）の表面はヤリガンナ仕上とした。白木の部分については、素材の集成材の重ね目が見えるのを防ぐために表面を単板張り（厚：1mm）する必要があり、単板の上からの施工は困難があるのでヤリガンナ仕上げは除外した。

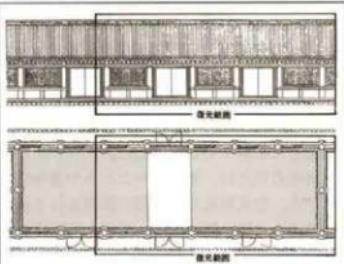


図35 復元想定平面および東面立面図

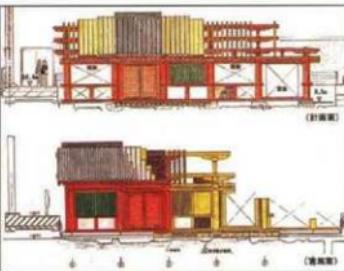


図36 建築表現の変更対比図

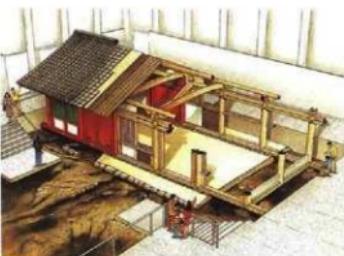


図37 復元建物イメージ図（実施案）

瓦は、出土資料に基づいて軒瓦、丸・平瓦、面戸瓦、懸斗瓦を製作することにした。使用する瓦は軽量化を図るために化学樹脂を素材とする複製品とし、軒瓦は実物の瓦から、丸・平瓦は出土遺物の数値に基づいてそれぞれの模型を製作することにした。復元する平安時代建物の瓦は、他の古建築例と同様に、建築とともに新しく造られた瓦の他に、以前の建物に使っていた瓦の中で使用に耐える瓦も再使用していることが調査成果から明らかとなっている。このため、時代や生産地の異なる瓦が混在して葺かれている状況を示す手法として、出土遺物を参考に黒灰色系と灰色系、その中间色の3種類の色の異なる瓦を製作して葺くこととした。

軒瓦は、出土資料の検討から、第Ⅲ期の建物の屋根を飾っていた軒瓦の大半が図38の奈良時代前期の所用瓦である鴻臚館1式の再使用で、建物の改築に伴う不足を補うために図38の右側の瓦が新しく造られたと考えられる。このため、建物の正面は出土数の割合に比例させた場合、背面は軒瓦の再使用が多かったものと想定して配置することにした。

基壇の復元は、基礎材のたわみや遺物出土状況の問題から、中央部北寄り2間の範囲を行う必要が有った。建物内を土間と想定して、真砂土で造構面を覆い、レンガ積みで土留めの後に上面を真砂土舗装を行い、基壇断面をモルタル仕上とした。また、基壇は自然石積一段であることから、欠失する練石を複製品で充填することにした。

・材料計画

建物を無垢の素材で建築した場合の造構に与える平均加重は、約1.2 t/m²である。据削などの基礎工事が許されない前提条件の中では、新しい素材や工法により最大限の軽量化を図らなければならなかった。さらに、製作期間と予算上の問題や、素材の特質なども考慮した結果、復元材料の大半を集成材や化学樹脂とし、さらに中空とした。白木のまま表現をする場合は、素材の特質から単板張り仕上をする必要が有り、加工痕などの表現には適してはいないが、あえて軽量化を優先させた。

b. 基礎計画

建物模型を造るにあたって、「②造構上に浮かせるようにして造構に何らかの影響を与えない。」とする課題については、吊り下げ式と自立式とを検討した。吊り下げ方式は、①展示館の屋根から鋼線で吊り下げる。②展示館の柱から吊り手の鋼材を伸ばして吊り下げる。③桁材を伸ばして展示館と接合して吊り下げるという方法が考えられたが、展示館建物にはこの工法による加重に耐えるだけの構造ではなかったことと、支保材がかなり露出することから採用しなかった。自立式は、建物の柱を支える練石の替わりとなるベースを作り、その上に復元建物を設置する方式である。建物模型は建築の順序が判るように棟までの部分から柱だけの部分まであり、構造的に不安定であることから、自立式が適した工法であると判断して採用した。

ベース部分は地盤と重なる位置にH型鋼材を配置し、展示館基礎とアンカーで結合させることによりベース部分を造構面から浮かせようとした。しかし、建物模型の自重や、15.5mある桁行の長さ等から生じたたわみ、ねじれを解消する必要があった。このため、中央部の盛土した造構面上に鋼板、鋼板メッシュを置いて加重を拡散させた。また、両側アンカー近くに梁行の鋼材を配置して、たわみ、

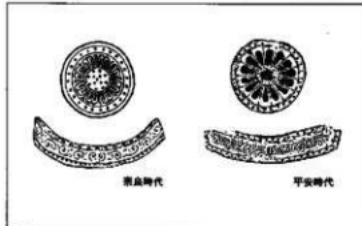


図38 建物模型用軒瓦



図39 基壇断面図

表16 主要部材重量比較表

材 料	形 状	重 量	實物重量
柱 集成材	中空	120kg/本	262kg/本
梁 〃	〃	190kg/本	293kg/本
棟 木 〃	〃	30kg/本	75kg/本
垂 木 〃	〃	15kg/本	81kg/本
斗 〃	〃	6kg/個	53kg/個
肘 木 〃	〃	8kg/個	78kg/個
壁 合 板	〃	38kg/間	530kg/間
軒平瓦 F R P	〃	0.7kg/枚	6kg/枚
軒丸瓦 〃	〃	0.5kg/枚	4kg/枚

ねじれの補強を図った。

建物跡のイメージを容易にするために模型のG.Lを既存の礎石の上面高に設定したところ、鋼材と礎石とが接することがわかり、礎石の位置する鋼材の高さを上げ、小規格の鋼材を使用することで問題の解決を図った。さらに、なんらかの影響で鋼材と礎石が直接触れないように厚さ35mmのクッション材を間に配置するようにした。建物と基礎部の一体化については、建物模型の構造面から、柱を強力に固定する必要があることから、各柱位置にベース部のH型鋼材と接合させた角形鋼管に中空の柱を被せる工法を採用した。鋼材の露出を少なくするために、中央部は基礎の復元、他は地覆、長押、地覆石であるべく隠れるようにした。

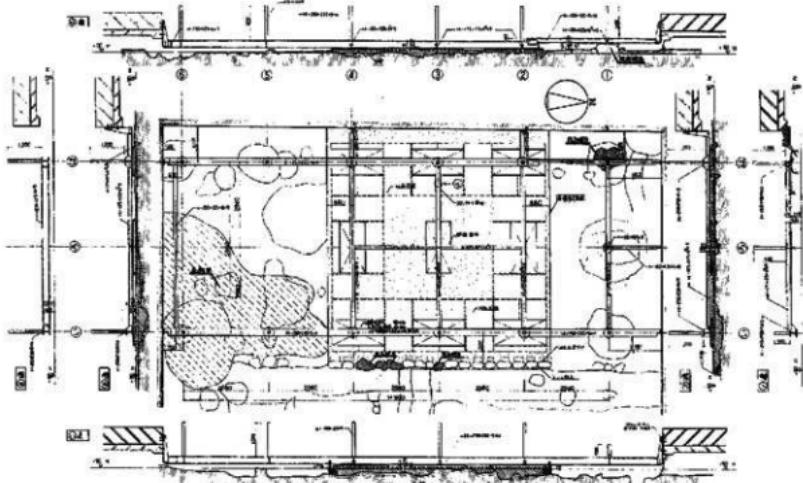


図40 基礎構造平面および柱脚部分断面図

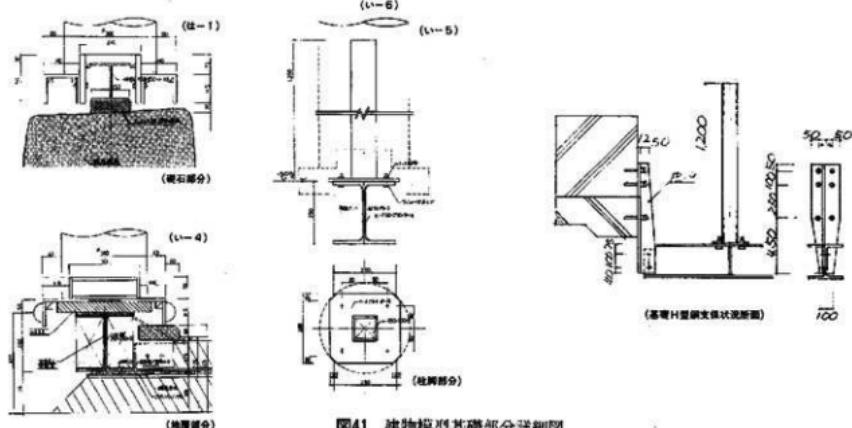


図41 建物模型基礎部分詳細図

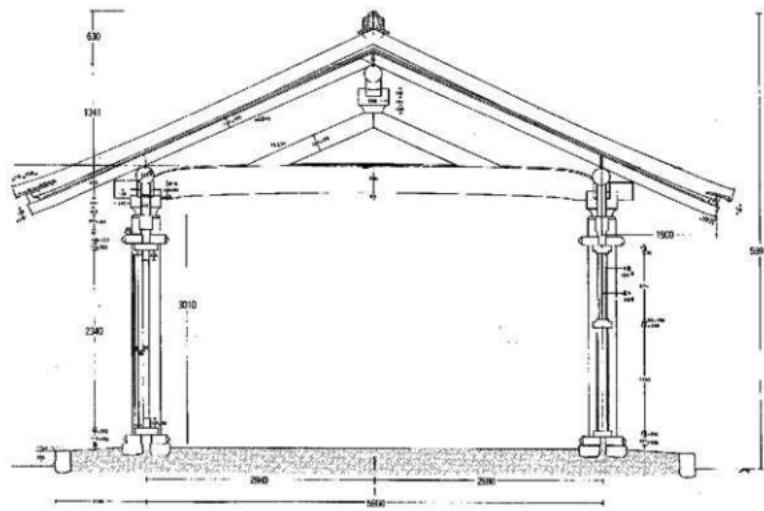
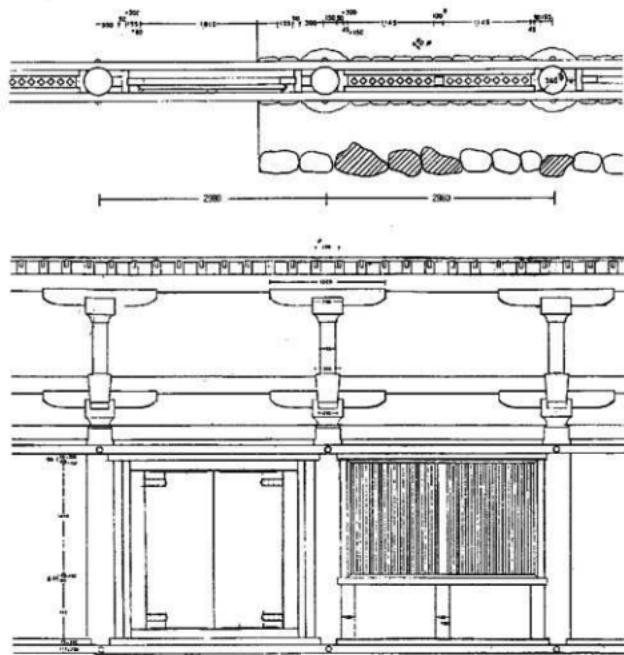


図42 建物復元案部分平面・断面・部分立面図

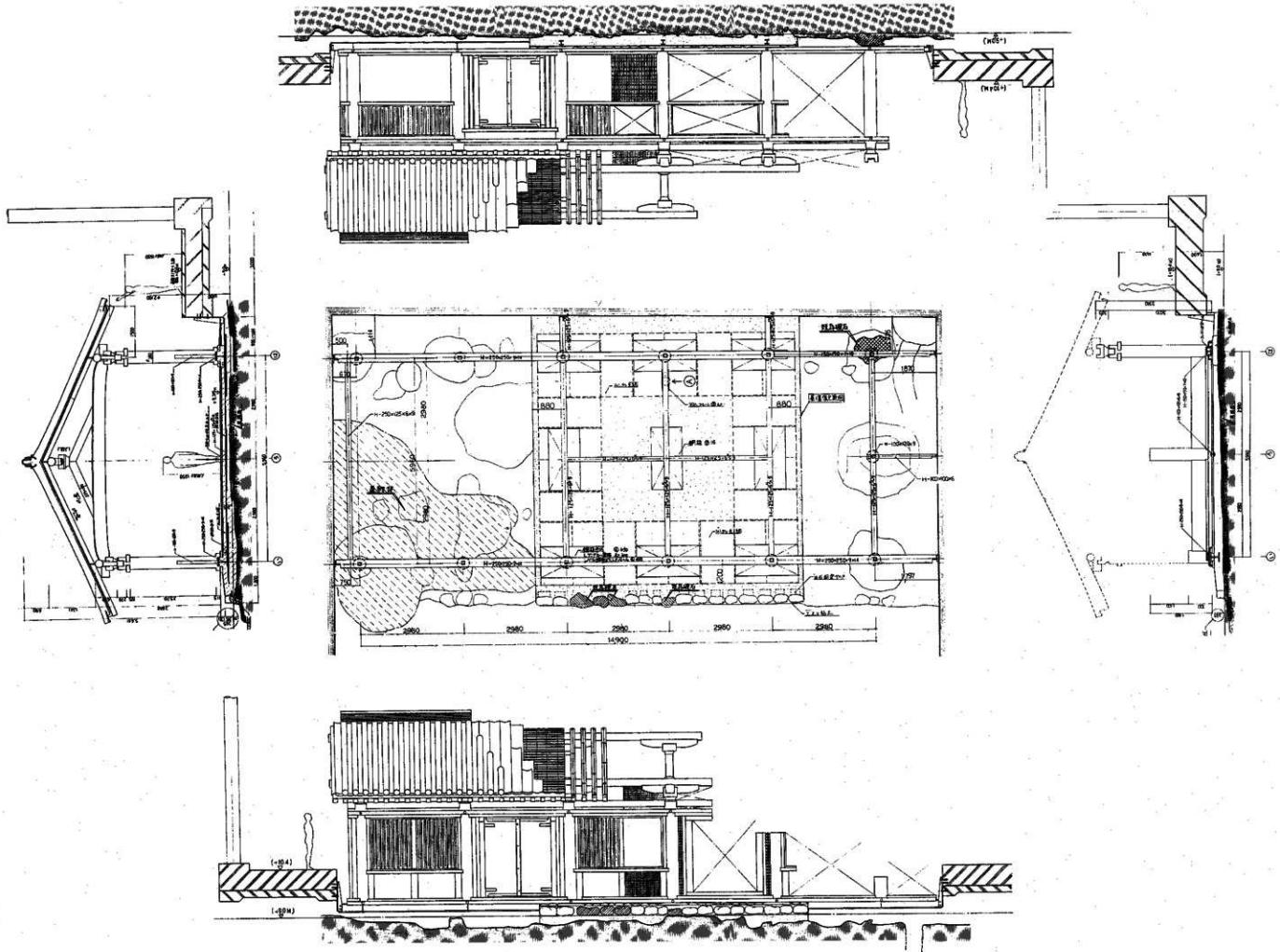


図43 建物模型平面・断面および東西側立面図

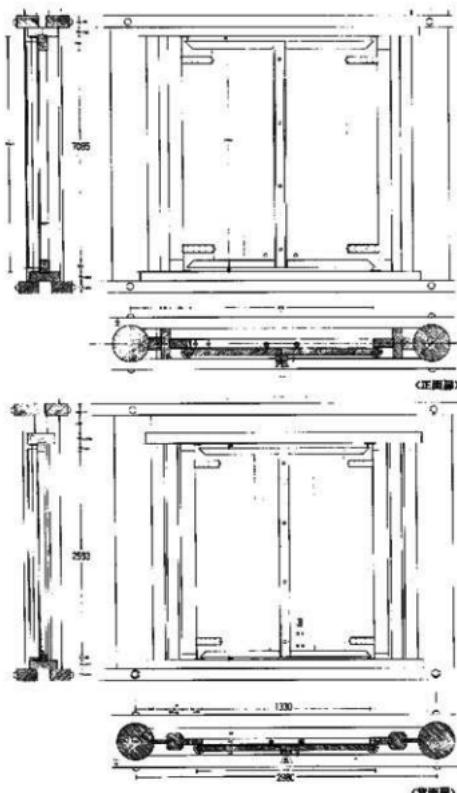


図44 屏立面および断面図

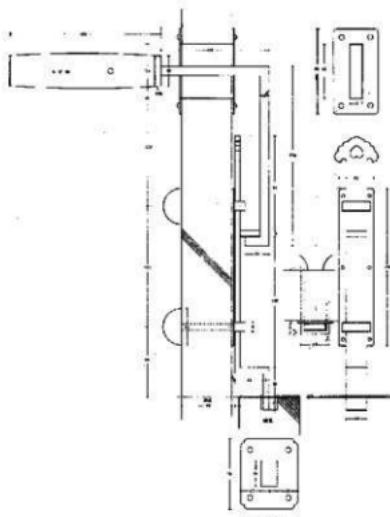


図45 背面屏門平面および断面図

表17 建物模型製作部材一覧

No.	部位	部材名	数量	No.	部位	部材名	数量	No.	部位	部材名	数量
1	構造部	柱	11.5	15	正面(東側壁)	扉	1	29	背面(西側壁)	まぐさ	1
2		大斗	14	16		まぐさ	1.5	30		蹴放	1
3		肘木	13	17		蹴放	2	31		方立	2
4		又首	4	18		方立	4.8	32		連子縦作り出し	4.5
5		梁	4.1	19		迎付け	4.8	33		連子子	28
6		丸桁	11	20		連子子	27	34		連子縦・横棒	14.5
7		棟木	1	21		連子中柱	2	35		連子縦・横作り出し	14.5
8		頭貫	8.9	22		連子縦・横棒	9	36		頭貫上下小壁	10.4
9		茅負	4.3	23		連子横作り出し	4.5	37		頭貫上下小壁	6.8
10		内法長押	17.7	24		扉部小脇壁	3	38		扉部小脇壁	1
11	部面	垂木	54	25		連子下小壁	1.6	39	その他	壁	
12		面上板	67	26		扉	1	40		壁下地	
13		地覆長押	26.8	27		中柱	2	41			
14		半長押	26.8	28		羽目板	2				

(7) 館外造構整備計画

1) 整備計画策定の経過

平成4年度に平和台野球場南側地区の調査が終了するものの、野球場を含めた本格的整備着手まではかなり時間を要することが予想された。したがって、全体整備に着手するまでの間、当該地区を仮整備し、広く市民に調査成果を公開する必要があり、平成4年度第1回指導委員会において整備の検討が始まった。実施設計に至るまでには、指導委員会、文化庁からの指導、助言を得ながら計画の策定を行った。

a. 第1段階（平成4年度）

この段階では、検出造構をもとにした整備素案（図46）を委員会に示した。この素案は、整備地内の既存施設（プレハブ調査事務所、倉庫、便所）は現状のままとし、整備地区の西側を平安時代ゾーン、東側を奈良時代ゾーンとして、建物基壇の復元や植栽による造構表示を行うものであった。2つのゾーンにしたのは、造構の残りの良好な範囲が、時代により異なるためである。

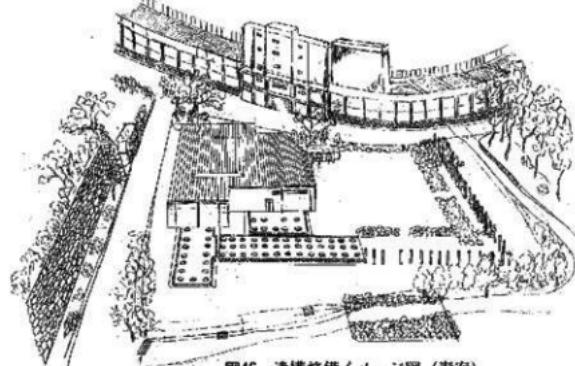


図46 造構整備イメージ図（素案）

b. 第2段階（平成5年度上半期）

この段階で第Ⅰ期整備基本方針が策定され、工期を1995年度予定のユニバーシアード福岡大会開会前までに完成させることが決定された。基本方針は以下のとおりである。

- ①地下の造構に影響の無い工法を取ること。
- ②確かめられた造構をわかりやすく表示すること。
- ③展示館内と館外整備との連続性を図ること。
- ④第Ⅱ期整備にあたっての検討材料として、実験的手法を試みること。
- ⑤憩いの場として活用できる空間にすること。

基本方針を受け、基本設計では、整備地内の利用空間の見直しを図り、時代の異なる三時期の造構表示の整備骨子を下記のとおり決めた。また整備計画策定作業を進めるにあたって、指導委員会内に小委員会を編成し、具体的な検討に入った。

- ・整備地区内においては、遺跡の広がりや視界・動きを妨げる立体構造物の設置をしない。
- ・整備面に段差を設けることによって、奈良時代と平安時代の異なりを表現する。
- ・展示館内と館外における整備地域との造構の連続性を図るために、仕上がり高は展示館床面との比高差をなるべく少なくする。
- ・三時期の時代差を明確にするため、造構の表示素材を時期別に異なった素材を用いる。
- ・第Ⅰ期造構〔水〕 · 第Ⅱ期造構〔木〕 · 第Ⅲ期造構〔石〕

表18 整備A案概要表

整備の特徴		基壇復元、半立体復元、全体模型の設置	
造構表示の平面区分		東半分を奈良時代の面、西半分を平安時代の面とし、時代差を表現するために約40cmの比高差をつける。	
時期	対象造構	材質	表示の具体的手法
第Ⅰ期造構	門	石材、木材	基壇、階段、柱
	塀	木材	低い柱と塀
第Ⅱ期造構	掘立柱建物	植栽	芝種または芝目の差異による建物範囲の表示。柱穴部はポット植栽を用いた季節の草花による表示。
	第Ⅲ期造構	礎石建物	石材
			礎石を復元配備

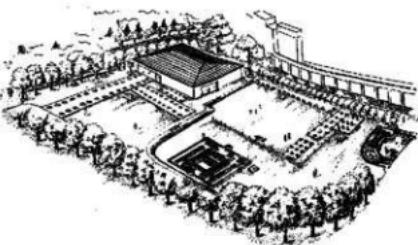


図47 整備A案イメージ図

表19 整備B案概要表

整備の特徴		時間差によって空間の見せ方を変える	
造構表示の平面区分		A案と同様40cmの比高差をつける。	
時期	対象造構	材質	表示の具体的手法
第Ⅰ期造構	門	石材、木材	基壇、階段、高い丸柱、表面には水を落す。
	塀	水と配石の組合せ	黒塗による基礎部の表示、噴水による柱と塀の表示。
第Ⅱ期造構	掘立柱建物	植栽	芝種または芝目の差異による建物範囲の表示。柱穴は植栽による大きさと位置を表示。
	第Ⅲ期造構	礎石建物	石材と木材
			礎石を復元配設する。丸柱を立てる部分は展示館内との連続性を持たせる箇所のみとする。

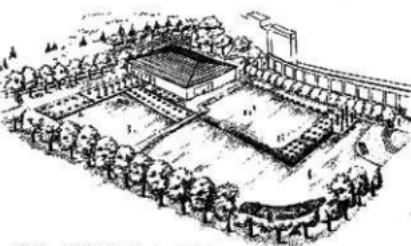


図48 整備B案イメージ図

表20 整備C案概要表

整備の特徴		オーソドックスな都市公園の手法である	
造構表示の平面区分		A案と同様40cmの比高差をつける。	
時期	対象造構	材質	表示の具体的手法
第Ⅰ期造構	門	石材、木材	基壇、階段、高い丸柱
	塀	瓦、木材	一部基壇の復元、芯持ち柱による塀の表示。
第Ⅱ期造構	掘立柱建物	植栽、石材	芝種または芝目の差異による建物範囲の表示。柱穴はベンチとして利用できる石とする。
	第Ⅲ期造構	礎石建物	石材
			礎石を復元配設

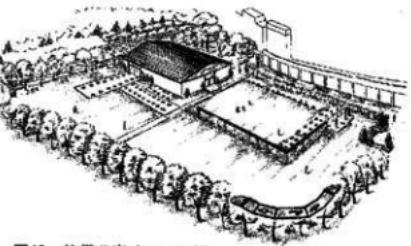


図49 整備C案イメージ図

小委員会での検討の結果、

- ①立体的構造物を恒常的に設置した場合は空間や利用者の行動を規定させてしまう。
- ②均一的な平面表示では3時期の時代差の理解に混乱が生じる恐れがある。
- ③施設の範囲が明らかとなっているⅠ期の解説された範囲を①と矛盾しない範囲で表示ができる。

などの点から、エントランスなどの一部変更の余地を残しながら、東側の奈良時代はB案、西側の平安時代はC案を採用し、第Ⅰ期造構に噴水を利用した造構表示の手法の検討を進めることになった。

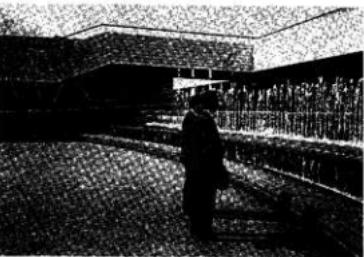


図50 噴水使用例

c. 第3段階（平成5年度上半期）

奈良時代の面は平面表示と半立体表示との併用、平安時代の面は基壇部復元の整備案（図51）を策定した。奈良時代の面における平面表示と半立体表示との併用とは、第Ⅰ期の堀を既存的に界線等によって平面表示し、間歇的に噴水（水）を用いて立体表示を行うものである。堀を表示する手法として水を採用するに至った検討の過程は表22に示した。なお時代差を表現するための段差は30cmとした。

表21 整備実施計画案概要

整備の特徴		時間差によって空間の見せ方を変える	
造構表示の平面区分		東半分を奈良時代の面、西半分を平安時代の面とし、時代差を表現するために約30cmの段差をつける。	
		材質	表示の具体的手法
第Ⅰ期造構	東 門 堀	石材、木材 水と配石の組合せ	基壇、階段、 界線による基底部の表示。 噴水による柱と堀の表示。
第Ⅱ期造構	掘立柱建物	木 材	建物の範囲や柱穴の大きさと位置を点で表示。
第Ⅲ期造構	礎 石 建 物	石と土	基底部の復元。

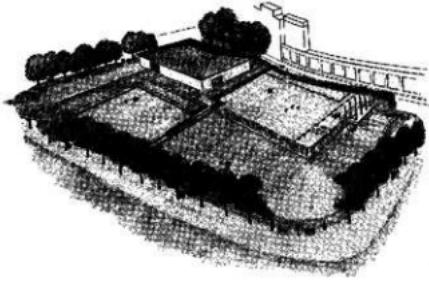


図51 整備実施計画イメージ図

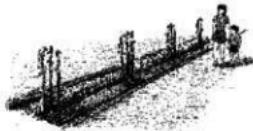


図52 第Ⅰ期堀の噴水による表示イメージ図

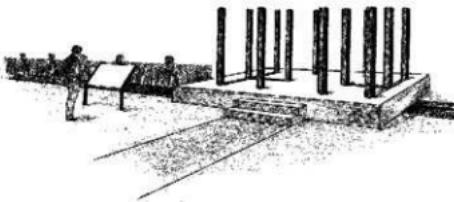
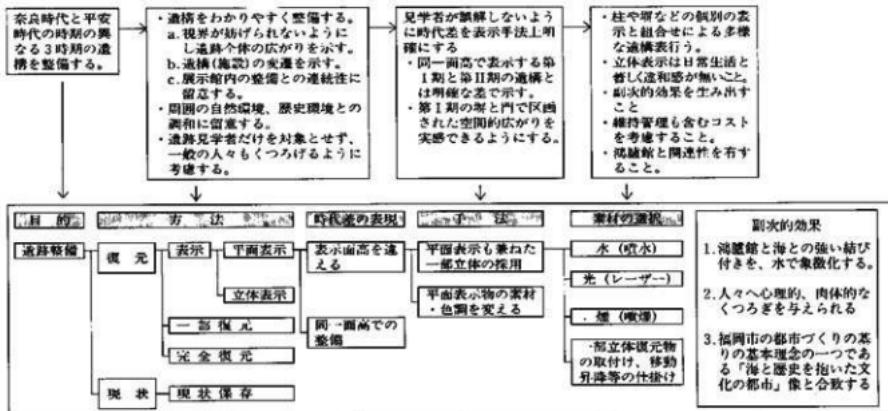


図53 第Ⅰ期東門・堀の噴水と立柱による表示イメージ図

表22 噴水による造構表示の検討過程図表



d. 最終段階（平成5年度下半期）

第Ⅰ期造構の棚、東門の噴水による表示を木材による平面表示に設計変更した。噴水案を変更した理由は、

- ①整備原則である「在った所に有ったもの」にそぐわず、現代的な噴水を使用することによって、当時に噴水があったと誤解する恐れがある。
 - ②噴水はアミューズメント（娛樂）的であり、整備の趣旨と噴水選択の理由に整合性が感じられず、迷路の整備にはふさわしくない。
- といった整備における基本的な問題点について、文化庁との協議を踏まえ再検討した結果である。また、時代別表示のために設けた段差は車椅子や老人の利用には利便性を欠くため、2ヶ所にスロープを設けることとし、設計をほぼ終えた。

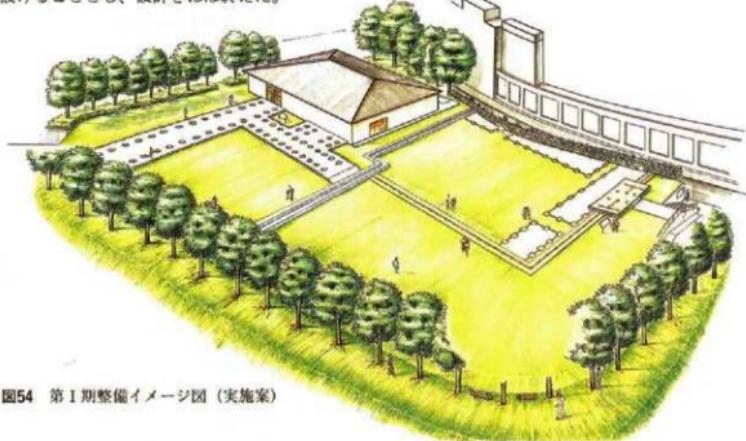


図54 第Ⅰ期整備イメージ図（実施案）

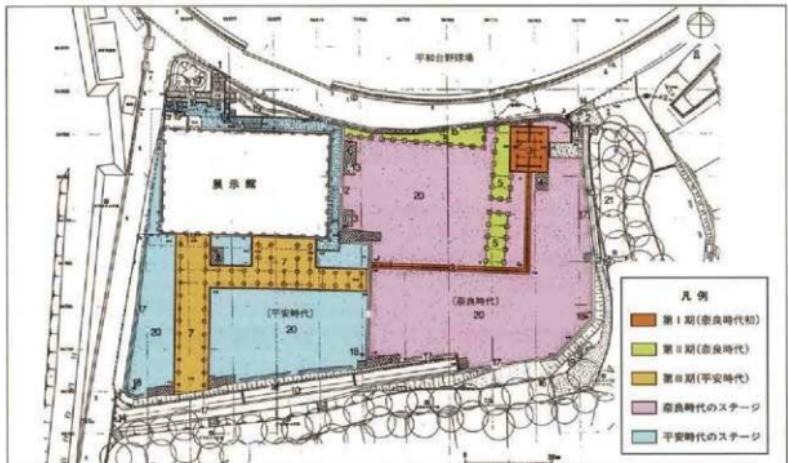


図55 第Ⅰ期整備実施計画概要平面図

2)館外造構整備計画

a. 造構表示計画

- 表示しようとする造構は、位置や規模、形態等が明確なものと推定復元のものがある。明確な造構は、第Ⅰ期の壇の柱掘方(布掘り)と柱穴、東門の柱掘方(布掘り)と柱抜取り穴、第Ⅱ期の建物造構の柱掘方、第Ⅲ期の建物基壇幅、礎石および礎石据付け穴の一部で、推定復元によるものは第Ⅰ期の東門基壇、第Ⅱ期の建物床部範囲、第Ⅲ期の南北棟の基壇延長部と、東西棟の基壇幅である。
- 造構表示にあたって同じ素材を使用する場合は、色(真砂土舗装)、種類(石、芝生)を追えて時代差、性格の違いを示した。
- 造構の表示材料は自然な素材(石、真砂土、木、芝生)を使用し、造構と関係の無い構造物(階段、通路、スロープ)は現代的な素材(コンクリート、アスファルト、粒石)を用いた。
- 第Ⅰ期造構は、東門柱跡および地覆、壇中柱および中軸位置に米松を用い表示。門跡の基壇は真砂土舗装を行い、推定範囲を緑石で示した。
- 第Ⅱ期造構の建物は、柱穴掘方を木レンガで、建物推定範囲を真砂土舗装を施した後で表示することとした。なお第Ⅰ期と第Ⅱ期の造構重複部分(東門推定基壇部分にあたる)についての表示計画は、これまでの調査で唯一平面形と規模が確認できている第Ⅰ期造構を優先することとした。したがって、第Ⅱ期造構上に表示した結果、時代の先後関係が表現上矛盾している。
- 第Ⅲ期造構は、基壇を真砂土舗装と緑石で復元し、礎石を表示した。なお東西建物については梁行二間の複数説があったが、単廊で復元した。

b. 造構保全計画

- 造構の保存と整備に伴う工事による造構への影響を少なくするために、整備地全体に造構面から平均50cmのクリアランス高を設定し、盛土によって造構の保全を図ることとした。
- 雨水からの影響を少なくするため、排水計画を十分にした。
- 造成工事に使用する重機は、通常より軽量、小型のものを用いた。

c. 管理計画

- 管理用道路を南辺部に設置し、維持管理が円滑にできるようにした。
- 動線計画に従いパイプ橋、ロープ橋を周囲に設置した。
- 展示館の東と北面には展示館入口につながる粒石舗装の通路を設けた。

d. 福祉計画

- 展示館および造跡整備の各出入口、時代別表示のために設けた段差部にスロープや手摺りを「福岡市公園施設標準設計図集」と「福岡型福祉社会のための環境づくり指針」を参考に設けた。

e. 排水計画

- 地盤(造構埋土)の粘性が高く排水が悪いので、集水樹や透水管を設置し、芝生の表面水や地下水の排水処理を図った。

- 側溝は、目立たないように皿形を多用し、土砂の流入が想定される所に限りU形を使用した。

f. 植栽計画

- 整備面全体は、遺跡見学に関係無く、憩いの場としても活用できるよう張芝とした。

- 芝生の種類(ノシバ、コウライシバ)を変えることにより、時代の違いを表現した。

- 見透しを確保するために低木ではなく、地被を用いた。

- 実験的に、展示館の軒下にも張芝した。

g. 休憩施設計画

- 立体構造物は整備地内の人の動きを制限するので、コンクリート階段ベンチで代用が図れるため設置数は2ヶ所のみとした。

h. 説明計画

- 説明板は、整備地より1.5m比高差の整備地南東隅に全体説明板、主要造構近くには各期の個別説明板を設置することにした。

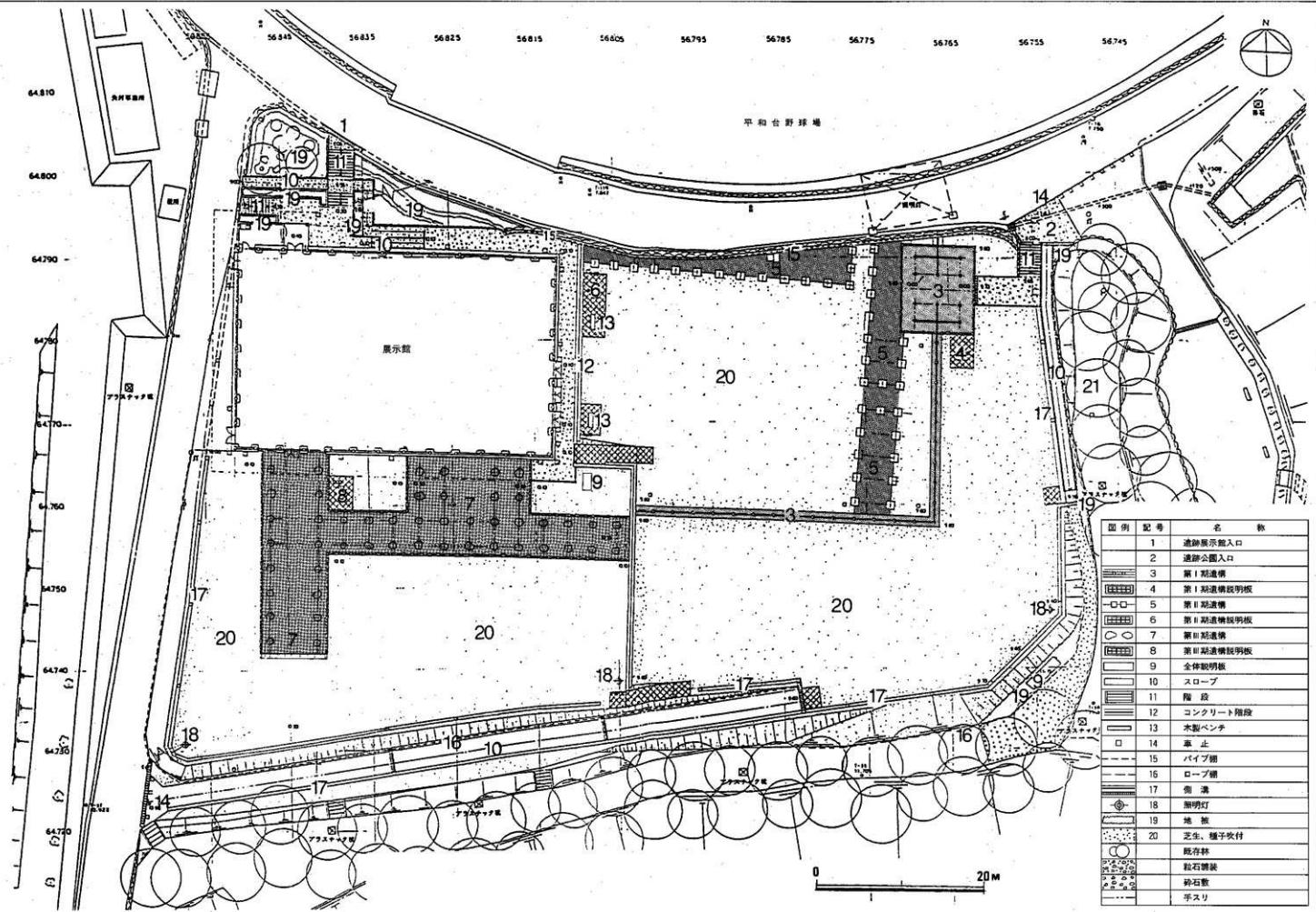


図56 第Ⅰ期整備実施計画平面図

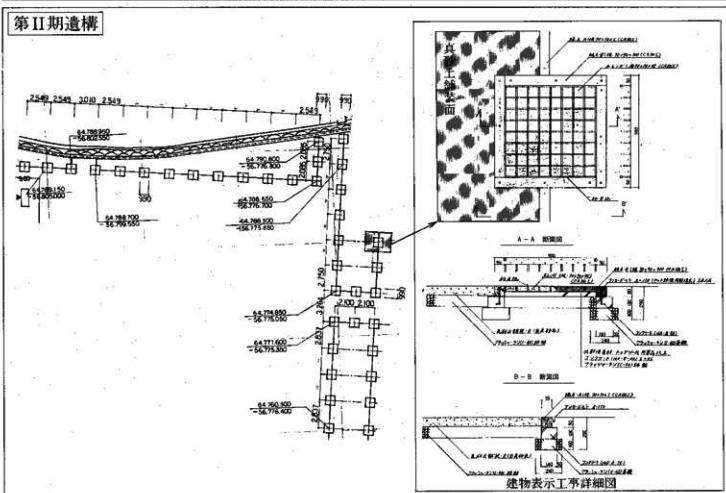
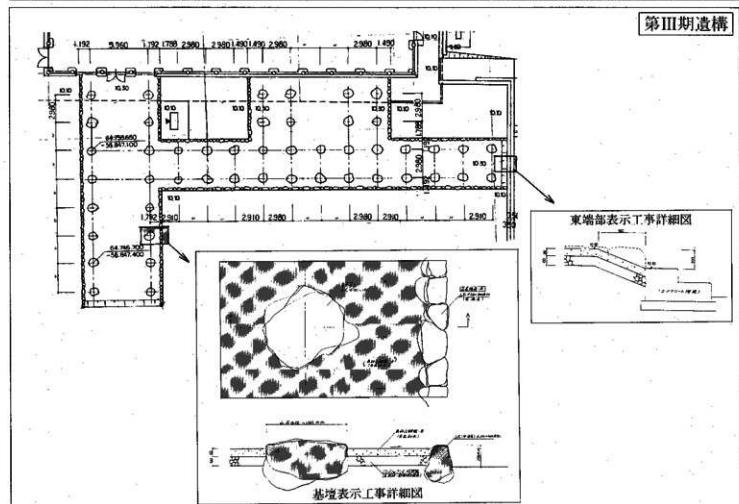
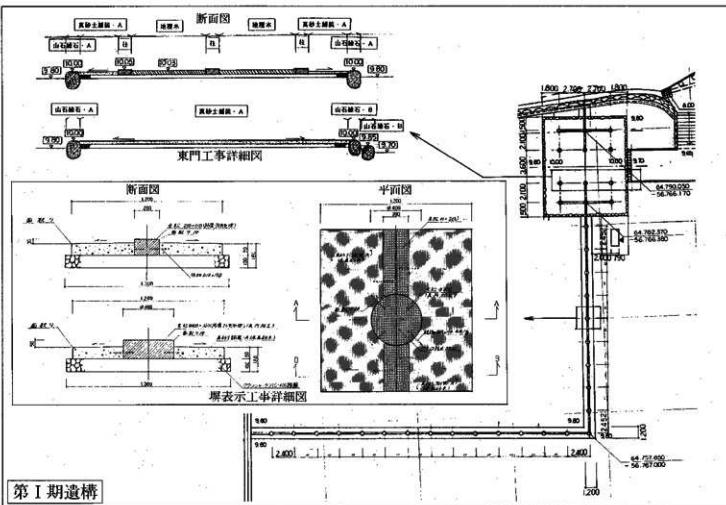
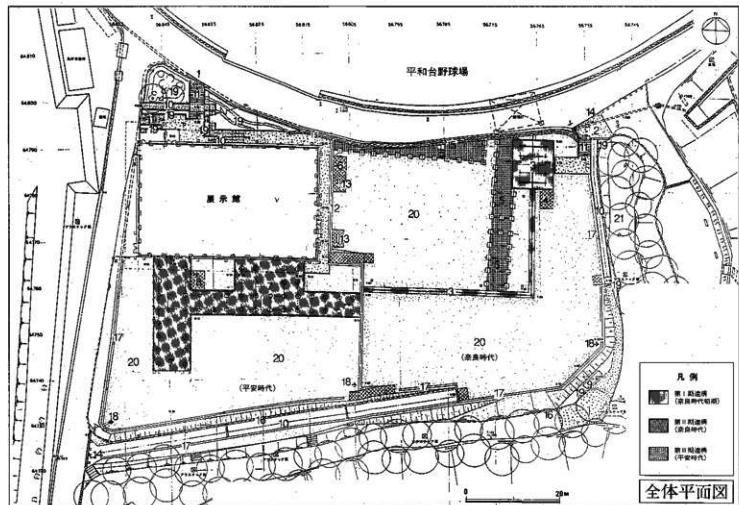


図57 第Ⅰ期整備実施計画部分詳細図

表23 第Ⅰ期整備施設概要表

名 称	内 容	名 称	内 容
■敷地造成工			
種子吹付	[100m ² 当] 径子1.4kg、高密度砕石料7.5kg、黄牛糞15.0kg、安定剤0.1kg (ケンタッキーブルーグラス0.8kg、バミュー ダグラス0.4kg、ハイランドベントグラス0.2kg)	横断面開削	本体(現場打コンクリート) 溝幅25cm×平均深さ30cm 蓋(グレーティング) 幅35cm×長さ約100cm×厚さ約4cm(細目)
■園路広場工			
斜 截	擬石階段ブロック (幅31cm×長さ60cm×厚さ5cm) 磨田ショット プラスト仕上げ、軸上:φ15cm	横断面溝削	本体(現場打コンクリート) 内径30cm角×深さ約65cm 蓋(グレーティング) 幅40cm角×厚さ約4cm(粗目)
コンクリート階段	幅35cm×高さ15cm×2段、金こて仕上げ、化粧 目地(各段の段差に2列)	U形側溝蓋	本体(現場打コンクリート) 溝幅24cm用(総幅約29cm×長さ約100cm×厚さ約3cm) 30cm用(総幅約36cm×長さ約100cm×厚さ約4cm)
粒石舗装	クラッシャーラン10cm+コンクリート7.14cm+ 表層1cm、表層材(エボキシ樹脂+天然石の粒 石:擬石の粗目に合わせた)	集水 槽	本体(現場打コンクリート) 内径30cm角、40cm角、50cm角×深さ45~65cm、 65~85cm、85~105cm 蓋(鉄格子蓋) 40cm角、50cm角、60cm角×厚さ2cm)
脱色アスファルト	クラッシャーラン10cm+表層3cm、 表層材(脱色アスファルト 茶色) 補装	ビニール管埋設	硬質塩ビビニール管 粒目15、20、25、30cm、砂壁埋
出 入 口	幅35cm×高さ11.5cm、下段15cm、 金こて仕上げ化粧目地 (各段の段差に上段1列、下段2列)	透水管埋設	合成樹脂半面透小型 端生部分の全面に布設 ※周囲は砂埋設 粒管 φ35×3本(径10cm相当) 10mm間隔 本管 φ40×3本(径15cm相当) 10mm間隔
■休憩施設工			
木製ベンチ	幅45cm×長さ180cm×高さ40cm コンクリートブロック基礎 栓(幅21cm×厚さ10cm、CCA処理) ひび割れ防止剤塗布	照 明 灯	灯具(細柱形 アルミ製 水銀ランプ 200V 300W) 柱(カラーアルミポール 燃焼茶色 高さ5m) 照明灯の間隔約50m。
芝生保護材	ポリエチレン製 505×505×15 (専用のビンで固定)	引込ケーブル	DVS 5.5 2C(公園内の電柱から架空廊で照明灯 に引き込み 2箇所) 東引き込んだ照明灯には自動点滅器を設置。
地 被	ヒペリカム・カリナリム (3芽立、ポット径10.5cm) 44株/m ² 。 ヘデラ・カナリエンシス (1.30cm、ポット径10.5cm) 25株/m ² 。 ヤフラン (3芽立、ポット径10.5cm) 36株/m ² .	ケーブル埋設	MAZV CV5.5-2C 埋設深さ約60cm。 埋設テープ(塗化ビニール製) 埋設深さ30cm、 埋設管(再生プラスチック 9cm角×高さ40cm) 照明灯の基礎の横に設置。
■管理施設工			
パイプ橋	高さ110cm×柱間隔300cm(石積等の天端に立ち 深さ20cm)。燃焼茶色(主柱Φ76.3×2.8、鋼緑 φ42.7×2.3、緑枝φ21.7×1.9×Φ148、168 STK400)	柱	米松 径40cm×厚さ13cm(地上高5cm) 真円加工 CCA処理(根元D10×15cm 4本/基)
ロープ橋	柱(枯木丸) :高さ70cm、中央部10cm×長さ120 cm、CCA処理表面焼き磨き仕上げ。 ロープ: 2段高さ30, 60cm(ミラーロープφ14) 高さ90cm、柱間隔200cm(階段の袖の天端に立 収み。深さ25cm) 燃焼茶色(丸パイプ構造柱、 鋼緑φ42.7×2.3 STK400 緑枝φ16×Φ125 大網) 階段の手すりを兼ねる	地木桿、輪木	米松 径20cm×厚さ11cm(地上高3cm) ×長さ 80~230cm、CCA処理(樹脂 D10×15cm 4.6 本/基) ※柱より2cm低くした
手スリ	地上高50cm、柱間隔200cm (スレーブの袖等に立ち込み)。 手スリ φ42.7×1.5 SUSS34 ヘアーライン仕上げ	山石練石	山石(野面石 花崗岩) 径20~30、30~40cm 2種類 地上高10~30cm 产地: 桜岡原大字府山(宝満山山斜面)
擬石車止	擬石コンクリートブロック 高さ45cm。	真砂土舗装	クラッシャーラン10cm-表層8cm 表層材混合物1m ² 当(白砂砾0.9m ² 、セメント 混合剤120kg、添加剤60L、エフロ防止剤4.4 kg、赤色顔料)。※顔料の配合量(固化剤に対する重量比)で色を変えた。配合比は、 第一期 4%、第二期 2%、第三期 1%
表山乗石(ビシャン)	表山乗石(ビシャン) 仕上げ引込式、※跳波に合わせた 鉄筋コンクリートブロック	縁 木	桧 幅9cm×厚さ9cm×長さ42~184.7cm CCA 処理 (コンクリート基礎ひさ10cm アンカーボルト固定)
三彩側溝	幅30/40cm×長さ60cm×厚さ7/11cm)。 本体(現場打コンクリート 内径25cm×45cm)、 深さ平均約6cm	木レンガ舗装	クラッシャーラン10cm+コンクリート4.5cm+ 表層4.5cm 表層材(桧 9cm角×厚さ4.5cm CCA処理、 砂目地 1cm)
直形側溝	コンクリート蓋 (幅29.4cm×長さ49.4cm×厚さ9.5cm) コンクリートブロック標準 (幅25/40cm×長さ45/60cm×厚さ5/15cm)	磯 石	山石(野面石 径70~100cm) 地上高約10cm (10, 30cm) 产地: 花崗岩 佐賀県二番町郡中郷村(青珠山地南斜面) 流紋岩 大分県宇都宮市(筑珠川及びその支流)

IV 整 備 工 事

1. 工事の全体概要

(1) 整備工事における法的な制約

整備工事が国指定史跡地内で実施されることから、整備計画の策定とその実施にあたって現状変更等の制限が課せられていた。したがって、今回の整備工事にあたっては、所定の手続きを経て現状変更許可を得て実施した。一連の手続きは以下のとおりである。

平成6年4月12日付福岡市教文第44号で福岡県教育委員会へ、平成6年度工事実施予定分（鴻臚館跡展示館・館外造構表示整備工事）の現状変更許可申請書を提出。根拠法は、「文化財保護法第80条」、「特別史跡名勝天然記念物又は史跡名勝天然記念物の現状変更等の許可申請等に関する規則」である。

平成6年9月20日付委保第4の464号にて、文化財保護法第80条第1項に基づいて文化庁から現状変更の許可がおりる。許可の条件は、①工事にあたっては福岡市教育委員会埋蔵文化財専門職員が立会うこと。②実施にあたっては福岡県教育委員会の指示を受けること、の2点である。

平成6年10月6日付6教文保第38号の2にて福岡県教育委員会から現状変更許可が通知される。

平成7年3月8日付 福岡市教文第547号にて福岡県教育委員会へ、平成7年度整備実施予定分（原寸大建物模型の製作設置）に関する現状変更許可申請書を提出。

平成7年5月17日付委保第4の275号にて文化庁から許可がおりる。

平成7年5月23日付7教文保第89号にて福岡県教育委員会から現状変更許可が通知される。

また、当該地は都市計画法に基づく高度制限・風致地区に指定されているために、新展示館の実施設計において、風致地区における制限事項について配慮した（24頁）。

(2) 整備工事における造構保存のための条件設定

館外造構表示整備計画の項で述べたように、今回の整備では、造存している地下造構の保存を最優先させる方針の下で、整備地全体に約80cm前後の盛土を施すと共に、展示館建替工事においては既存の旧展示館の基礎を活かし、その上に新たな基礎を付け足した。また建物模型の設置は造構面に浮かす工法を採用した（30頁・図43）。

その他の便益施設等の施工においても造構面を新たに掘削しないということを大前提としたが、整備工事のうち、地下の造構を壊す可能性のあるものについては、工事着手前と工事期間内における各整備工事担当者工程会議において事前に指摘し、立会調査が必要なものについては工事と並行して立ち会った。

以下の5地点で立会い、施工上の注意を指示し造構保全を図った。

第1地点は、展示館の基礎周縁部分のうち新たに拡張した北東コーナー部分である。掘削深度を造構面から10cm上面までとした。

第2地点は、暗渠排水管を連結する埋設桿のうち、展示館北東部と西側の掘削深度の確認を行い、埋設深度を10~15cm浅くした。

第3地点は、同じく埋設桿のうち筑紫館東門周辺部分の掘削深度の確認を行った。この部分では造構面上の盛土内におさまるることを確認した。

第4地点は、サブゲートとした北東部階段下の「U」字側溝埋設時における造構の有無の確認で、第9次調査の際認められた筑紫館創建時の整地層の一部を確認した。

第5地点は、展示館入り口前面道路部分の水道管理埋設に伴う造構の有無の確認で、筑紫館の布堀り地業跡を検出し、推定延長部分に位置することがわかった。記録化し部分的な掘削を許可した。（「鴻臚館跡6」福岡市埋蔵文化財調査報告書第486集）



図58 立会調査風景（北から）

(3) 工事概要と工程

平成 6 年度の整備は、展示館新築工事、展示製作、館外造構整備工事である。原寸大の建物模型製作は設計も含めて平成 6 年度から 7 年度にかけて実施した。工事種別に発注したために、着工日にばらつきがあるが、平成 6 年 10 月 8 日から展示館新築工事を着手し、7 年 3 月末までに 6 年度事業についてはほぼ終了した。この間 7 年 1 月 17 日に神戸大地震があり、展示館の部材の一部の入荷が遅れるハプニングもあった。造構表示整備工は一部手直しの箇所があり、同年 4 月 15 日に完工した。

平成 7 年度は、引き続いて建物模型を製作し、展示館への電源付設工事と館内主照明工事を行った。展示館の展示作業が終了したのは、開館 1 日前の 7 年 8 月 9 日である。

各工事の実施工程は表 24 のようになる。なお各工事の施行内容については以下の各項述べる。



図 59 着工前旧展示館内状況（東から）



図 60 展示館新築工事起工式（業者主導）

表 24 第 I 期整備工事全体工程表（平成 6 年 7 月～7 年 9 月）

年度	工事種別	工事事項	平成 6 年		平成 7 年		備考
			7～9月	10～12月	1～3月	4～6月	
着工準備	対象地内整理作業		—	—	—	—	遺物移動・ブレハブ撤去など
	造構発生作業		—	—	—	—	館内造構の盛土作業
	旧展示館解体工事	—	—	—	—	—	6 年 10 月 8 日着工。31 日～解体
	基礎工事	—	—	—	—	—	
	足場仮設工事	—	—	—	—	—	
	躯体工事	—	—	—	—	—	
	トラス組・屋根工	—	—	—	—	—	
	壁工事（折板・ガラリ）	—	—	—	—	—	7 年 1 月 17 日神戸大震災
	内装・設備工事	—	—	—	—	—	
	内外壁塗装工	—	—	—	—	—	
展示館建設	仮設足場解体・完工	—	—	—	—	—	
	展示品工場製作	—	—	—	—	—	7 年 3 月 25 日展示館完工
	展示ボード設置	—	—	—	—	—	6 年 11 月 1 日製作開始
	展示台製作設置	—	—	—	—	—	
	展示品展示作業	—	—	—	—	—	7 年 3 月 25 日製作終了
	照明調査・仕上げ	—	—	—	—	—	
	工作物撤去・樹木移植	—	—	—	—	—	7 年 8 月 9 日展示作業終了
	盛土整地工	—	—	—	—	—	6 年 12 月 2 日造構整備着工
	暗渠等排水工	—	—	—	—	—	
	造構配置測量設定	—	—	—	—	—	立会調査と並行して実施
6 年度	造構整備工事	—	—	—	—	—	
	第Ⅰ期造構整備工	—	—	—	—	—	
	第Ⅱ期造構整備工	—	—	—	—	—	
	第Ⅲ期造構整備工	—	—	—	—	—	
	立会調査	—	—	—	—	—	5 地点について実施
	管理・道路工	—	—	—	—	—	
	便益施設工	—	—	—	—	—	
	機器工	—	—	—	—	—	
	完工	—	—	—	—	—	
	都材工場製作	—	—	—	—	—	7 年 4 月 15 日完工
7 年度	都材工事	—	—	—	—	—	6 年 12 月 15 日都材模型製作
	都材仮組立	—	—	—	—	—	7 年 6 月 6 日着工
	照明工事（配線）	—	—	—	—	—	7 年 6 月 23・24 日仮組立全
	都材組立	—	—	—	—	—	7 年 6 月 30 日組立開始
	彩色塗装工事	—	—	—	—	—	
	仕上げ工・照明調整	—	—	—	—	—	7 年 7 月 15 日都材模型製作終了
	完工	—	—	—	—	—	7 年 5 月 12 日着工～7 月 15 日
	新展示館電源付設工事	—	—	—	—	—	7 年 7 月 20 日着工～8 月 3 日
	新展示館主照明工事	—	—	—	—	—	15,000 人入場（会場：市博物館）
	海賊船跡展示館開館記念特別展示会	—	—	—	—	—	

2. 展示館建設工事

(1) 仮設工事

解体工事に着手する前に、造構を保護するためまず全面に真砂で盛土をおこなった。内部にも柱組足場を設ける必要があるため、当初から盛土の上に雨水の浸透を少なくするためにビニールシートを敷き、更に厚さ12mmのコンパネを敷き詰めた。全面に足場を設置したこと、トラスの組立や電気工事が安全かつ迅速に進めることができた。

(2) 既存解体工事

既存建物の解体は50tクレーン重機を使用し屋根、外壁、トラス材と大きく切断して順次解体を行った。造構保護のため、北東部の盛土の薄い箇所への重機の進入は禁止した。

付属便所棟のコンクリート基礎の解体は、事前にその付近の調査は済ませていたが、再度立会いの上慎重に行った。

(3) 基礎工事

新設基礎の既存部との繋結は、ケミカルアンカーに13mm鉄筋を挿入したものを、1.2m間隔で設けた。また基礎厚みを薄くするために、強度が270kg/cm²のコンクリートを採用した。平面拡張に伴う、新たな根切り箇所については、事前に施工箇所、施工方法を協議し立ち会いの上行った。



図61 造構養生状況



図62 旧展示館解体状況



図63 新展示館基礎配筋状況



図64 柱組立終了



図65 屋根トラス組立終了

(4) 鉄骨工事

アンカーボルトのセット及び丸柱の建込みについては、柱脚固定と柱頭のトラスとの接合の関係から高度の施工精度が要求されたが慎重な施工管理の結果、十分に許容範囲内に納める施工が出来た。43本の丸柱が建ち上がった姿は福岡城内という事もあってか、パルテノン神殿を彷彿させるものがあった。鉄部の塗装はカラー錆止めのみで外部の指定色に合わせた。



図66 トラス支承部取り付け状況

(5) トラス工事

立体トラスは太陽工業(株)のTMトラスとした。

表25 トラス部品数量表

TMパイプ		グローブ	
径mm	数量(個)	径mm	数量(個)
48.6	88	85	54
60.5	454	110	112
76.3	497	130	28
89.1	112	150	16
101.6	18	180	57
		200	8
		260	2

鉄骨柱との接点となる支障部のグローブはブレードに溶接し、各パイプの組立はクレーンで釣り上げ、トルク値を確認しながら人力で締め付けた。



図67 トラス組立状況



図68 屋根トラスおよび柱内部

(6) 屋根、外壁工事

屋根等の折板は三見金属工業(株)の製品で、耐久性を増すため亜鉛アルミ合金メッキ鋼板を採用した。屋根部は〈大型円筒葺き140〉、外壁横張りは〈大和張30〉とした。施工は飾棟、下り棟、二重軒先腰板と飾り金物が多いため高度の技術が要求され、取り付けにも時間を要した。軒先巴を持つ半径200mの大屋根は自然な反りを出せたようだ。壁の横張と軒裏は鋼板メーカー（東海鋼業）の近似色Y-27を採用したが、その他の部材は当初設計の色に合わせ特注色とした。



図69 飾り棟取り付け作業



図70 屋根、下り棟、軒先巴



図71 二重軒先のようす

(7) 金属製建具工事

〔アルミサッシュ〕：外壁の中で目立たない色でかつ現代的な素材の自然な表現としてシルバー色とした。

〔アルミガラリ〕：換気と排煙のため、軒棟部と軒下に縦型ガラリを設けた。軒棟部は暴風時を考慮し、特に防水性の高いルーバ型とした。軒下は換気を重視し開口率50%としたが、予想以上に光が漏れ、ほんのりとした自然光の効果となった。

〔スチールドア〕：正面入り口のドアは外壁と柱の色を使い塗り分けを行った。ガラスは熱線吸収ガラスの濃いブロンズ色とした。



図72 ガラリ取り付け状況



図73 展示館受付および入口

(8) その他の建築工事

〔階段工事〕：造構面へ降りる階段は、鉄骨部材に踏み板のコンクリートPC板を乗せる構造で、1ヶ所当たり1,500kgとなった。支持方法は基礎コンクリートからの片持ち形式とし、造構面へ負荷を与えないようにした。

〔ガラス工事〕：防犯上の為、ガラスは網入りとしたが内から外への視線の邪魔にならないように縦線タイプを採用した。

〔シリング工事〕：屋根、柱、外壁の各部については、標準色の中から近似の色を採用した。朱色の軒先模版部は、近似の標準色がないため特注色とし色を合わせた為、模版のシャープな線が出せたようである。



図74 館内南側階段施工状況



図75 階段完成状況

(9) 照明等設備工事

非常用照明器具は取付位置が高いので、高輝度タイプとした。器具や機器の取付についても下地の支持材がないため取付方法に苦慮し、配線配管が見えないようにした。ライティングダクトの取付は支持方法、強度についても検討を重ねた。電線管、スピーカーも建築の塗装色に合わせた。

非常用警報装置は、通常の露出ボックス型とはせず表示灯、ベル、発信機を独立して配置し、目立たないようにした。

(10) 総括

今回の工事は折板工事、鉄骨工事、建具工事の3工種がポイントであったので、その細部の納まり、寸法の相互の関連には施工図段階で十分に検討を重ね施工を行った。また屋根、外壁の折板工事は予想以上の時間を要し、外部足場の解体が遅れ外整備工事の工程に大きな影響を与えた。また鉄骨工事の建方の途中で阪神大震災が発生し資材の運搬に支障をきたした。

竣工した新展示館は、仮設物ではなく展示館建築として設計、施工共に完成度の高いものになったと思う。



図76 完成した展示館（正面）

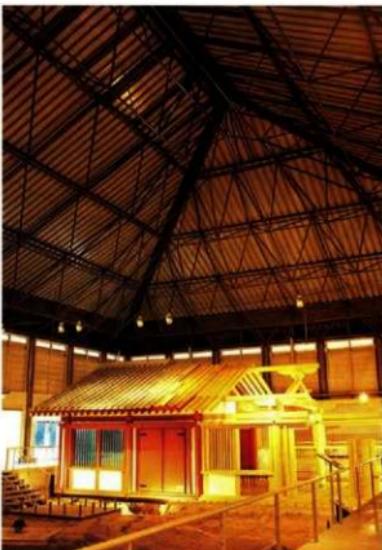


図77 建物模型と屋根トラス



図78 完成した展示館と造構整備（南東から）

3. 展示製作および照明工事

(1) 展示製作

展示工事は通路壁面展示が主である。壁面の展示有効面積は226.8m²である。また入館者の墜落防止用のアクリル板を通路手摺面に付設した。

製作物は展示用壁面製作、説明用パネル、コーナーサイン、展示台、展示ケース、埋込展示ケース、保安用アクリル板、造物説明題鑑、屋外と受付のサインである。

製作は業者工場で行い、建物模型の設置作業の完了を待って、平成7年8月5日～9日の間に造物展示までの作業を終えた。

展示は、露出造構と建物模型との関係、および館内と館外造構の連続性を損なわないように、視界を妨げるような余分な構造物を配置せず、通路外周の壁面展示のみとした。

展示用壁面は、展示館内壁も兼ねた軽量鉄骨を骨材とする合板クロス貼りパネルである。高さを2.8mとし、最上縁部にはコーナー毎のテーマカラーを設定し、視覚的にテーマイメージを理解しやすくした。高さ2.35mの位置には説明パネル吊り下げ用のピクチャーレールを設けた。

なお、コーナー「鴻臚館の精華」については、展示棚を将来付設できるようにアルミラインパネルを設けた。

説明用パネルは26枚製作。内訳は、防湿コート仕上げ木軸パネルが21枚、木枠組土層剥ぎ取りパネル2枚、スタンド式パネル1枚、造構説明用パネル2枚である。パネル仕様はコーナーサインと同様、コーナー単位でパネルテーマの色分けをした。

説明パネルの吊り下げにあたっては、目標高を床面から1.3mとし、各パネル中位置ですべて揃えた。

説明パネルを防湿用コート仕上げにしたのは、展示館が自然換気であることから、湿気による経年変化ができるだけ防ぐためである。

コーナーサインは、各コーナーの区分を明確にし、コーナーテーマを理解しやすくするために設けたもので、半円柱形のポールを立てて、スポット照明によりテーマ名称が浮き立つようにした。

展示台は、可動式ガラス製のぞきケース1台、埋込み式ケース1、ガラスカバー付き展示台9台である。展示資料をなるべく間近に見ることができるように60～80cmの高さの床置き式で展示した。

保安用アクリル板は、造構露出版示部分の、筑紫館の「掘り込み地業」土層観察用トレンチ（深さ2.8m）が通路に近接していることから、手摺の隙間を縫って、見学者が墜落するのを防ぐために設置した。

説明用題鑑はアクリル製印画紙貼で黒色ベースに白抜き文字（プロセス印刷）に統一し、英文を添えた。



図79 展示ボード製作風景

鴻臚館
鴻臚館の成り立ち
鴻臚館の精華
造唐使
鴻臚館の発見と調査
情報コーナー

図80 テーマカラー



図81 コーナーサイン



図82 「鴻臚館の精華」コーナー



図83 館外サイン

(2) 照明工事

展示の中心が建物模型と造構展示であることに加え、造構保存の観点から照明をなるべく低照度にする方針から、建物模型→壁面展示→造構展示部分の順序で照度を落した。また壁面展示では、コーナー「漁舩館の精華」を最も明るく設定し施工した。

照明器具付設のための配線ブロックは、展示館屋根トラス部分、壁面展示部分、通路、造構展示部分の回りを巡る通路下壁面、および建物模型の5つに分けられる。

1) 展示館屋根トラス部分

造構展示面への照明として取り付けた。照明器具は紫外線カットガラス使用の250W/200Vスカイビームハイパワースポットライトを用いている。

2) 牆面顯示部分

床面から高さ3.0mの位置に、展示用壁面から1.5m離してライティングレールを並行して設けた。照明器具はミニハロゲンランプ85Wスポットライトを使用。1枚の説明パネルに2~3個のライトを用いている。

3) 通路部分および通路下壁面

専用の照明器具は取り付けていない。将来の展示ケースの増加や、展示替えを配慮し床面および壁面にコンセントが必要と思われるところに配置した。

4) 建物模型部分

建物模型が立体的な構造物であることから、屋根照明、壁照明、床面および構造部分の照明に分けた。屋根照明は、通路床面から5.6mの高さの位置に、建物模型に並行して張った直径9mmのワイヤーロープに配線工事をを行い、照明効果を配慮しながら屋根器具を任意の箇所に吊り下げる方法を採用した。照明器具は、熱線吸収反射板付きの250W個を使用している。壁面と床面、および構造展示面について配し、照明効果を配慮しながら、任意の箇所にミニハロゲン

表26 館内照度状況一覧表

測定個所		照度(ルクス)
正面入口(外)		1000~1500
正面入口(内)		100
東面入口(内)		350
南面入口(内)		250~300
通路	北側	70~80
	南側	30~60
マネキン壁面		最大1200 平均600
遺構展示面		東側 80 中央 65
建物模型北側		80~100
南側		80
壁面		60~160
溝蓋部の精華コーナー		最大900 平均400
全体復元模型		30
出土状況レプリカ		180

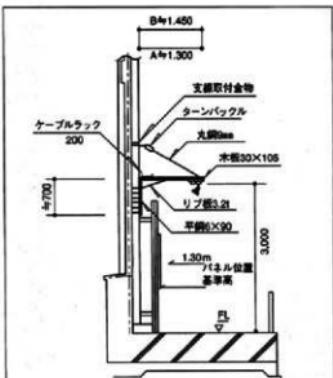


図84 ライティングレール取付状況断面図



図85 「鴻臚館の精華」コーナー展示状況



図86 館内展示状況

4. 建物模型製作

(1) 製作・設置にあたっての条件

建物模型の製作は、澤村仁氏の監修による建物復元案を基本にした製作設計にもとづいて実施した。実施前に文化庁と協議し、建物模型を造構面直上に設置することから、荷重計算等を行い造構への影響等を検討することと、製作設置においては造構の保全を図って実施することを条件として、史跡地内における現状変更の許可が得られた。造構への荷重計算等についてはすでにふれたとおりである(30頁)。造構保全については、展示館西半分の造構面を盛土で覆った後作業を行った。

(2) 製作の内容

基壇の一部復元も含めた基礎工事と本体製作に分かれる。

1) 基礎工事

模型製作における基礎工事は、建物模型直下の造構への負荷を軽減する工法をとりながら、模型を支持することを目的とした。模型の総重量が 13,637.36kg であるため、見学用通路で荷重を保持し、建物模型中央部でたわみを受けるための盛土を行った。建物模型の柱下端部はたわみによる重量負荷の影響がないように、礎石部分で 3.5cm、その他の造構部分で造構面から 20~40cm 浮いた状態で設置し、盛土部分は基壇として復元。

基礎工事は、造構および展示館施設の養生作業を行った後、以下の内容と工程で行った。

- ① 部材吊り下げ用のワイヤロープ 3 本を展示館柱に付設した。
- ② 建物模型中央部に南北 7.8m、東西 8.5m の範囲で造構面に真砂土による盛土を厚さ約 20cm で施す。
- ③ 見学用通路壁面に支保材のプレートをケミカルアンカーによって固定するとともに、転圧した盛土面に直接荷重を受けるための鋼板を敷き、H鋼を梁と桁方向にそれぞれ架構し微調整後固定。現存する礎石面上には、礎石の保護のためにラバー製クッション(厚さ 3.5cm)を入れた。
- ④ H鋼上面の建物模型の柱位置に柱脚用骨材となる角形鋼材(100mm 角、高さ 48.8~118.4mm)を溶接によって固定した。
- ⑤ H鋼および鋼板を盛土で覆い、セメントおよび硬化剤を混入した自然土を用い、表面を叩き土間風にランマーによって仕上げた。染行方向の復元基壇断面については、土止用レンガをモルタルで固着させた。基壇部の色は建物の延長部分にあたる館外造構表示部分と同色とした。

2) 本体の製作

ウレタン素材の擬石や、強化プラスチック製の瓦のレプリカ製作、木または鉄材の建築部材・飾り金具等の製作に分かれる。

- a. 基壇縁石・地覆石・礎石などの擬石は鴻臚館跡出土品を参考にしながら、樹脂で原形を製作後、ケズリ出しによって整形しアクリル系塗料で着色した。
- b. レプリカ製作によるものは、軒丸・軒平・丸瓦・平瓦・熨斗瓦・棟瓦である。原形の瓦は、鴻臚館跡と大宰府出土品で、シリコン材で型取りした後、強化プラスチックを素材として製作した。瓦の製作枚数は、1927枚である。軒先瓦は軒丸・軒平瓦とともに 2 種類の文様形式のものを、鴻臚館跡の出土比率 7 : 3 に合わせて製作した。



図87 基壇部整地状況



図88 基礎鉄骨取付状況



図89 基礎工事基壇面整地



図90 瓦レプリカ製作のようす

着色もまた、出土瓦の色調を参考にしながら、3種類に色分けし、焼きムラや色ムラを表現した。

- c. 製作した建築部材は、表17に示した。建物模型本体の軽量化を図るために、柱や梁等の大型部材は集成材で箱型中空にし、連子窓や小舞等の小型部材に無垢材を使用し、本格的に無垢材で復元した場合の約71%の荷重減率が得られた。瓦まで葺いた部分（完成した状態を示す範囲）の柱や頭貫、地覆、長押、頭貫、連子窓などは、丸施でヤリガンナ風に表面を加工し着色した。色調は、薬師寺東塔を参考にして、柱、頭貫、扉等には丹塗りを想定した朱色、連子窓には深緑色、垂木小口には黄土色を塗り分けた。その他の部分は白木のままで化粧薄板張り仕上げとし、表面の保護のために艶消しクリヤ塗装を施した。集成材の表面を削った場合には、単板張りかまたは彩色しなければ集成合わせ目が見えるため、表面加工はしていない。なお着色塗料はアクリル系塗料である。

壁は、小舞が露出している部分、完成している部分に分けて表現している。小舞は割り材を使い、荒糰で結束した。壁は合板製で、箱型中空に製作した後に白漆喰壁風に吹き付け塗装した。なお、建物の部材の断面部分と基礎断面の表現については、灰色を統一色として用いた。

3) 組立

各製作部材は工場内で仮組みし、部材のおさまりの確認と小舞などの手直しを経て完成した。組立工程は以下のとおり。

- ①部材の搬入。
- ②柱を角型鉄骨製柱脚に固定後自立させた。
- ③対応する両側壁の柱間1間分について地覆、建具部材（壁と連子窓は一体で製作）、長押、頭貫、大斗、舟肘木、頭貫下の小壁の順で組み上げた。
- ④虹梁を架け、両側壁を構造的に一体化し安定させる。
- ⑤②～④までの同じ工程を行いながら、地覆～虹梁までの全体の輪部を組立てて。固定は主にボルト締めによる。
- ⑥丸桁を固定した後に、虹梁上に又首、棟柱、垂木を架構し垂木間の小壁を取り付け、上屋組を完了した。
- ⑦屋根部分は、瓦葺きの工程と構造を示すために、野地板、小舞、葺土をそれぞれ見えるように配列し、また瓦も葺き始めから葺き終わりまでを段階的に示した。瓦は、葺土が見えないところについては葺き土の厚さにあわせて合板でかさ上げし、発泡スチロール片で高さを調整後、エボキシ系樹脂で接着固定した。
- ⑧本体の組立作業が終了後、照明器具取り付け、彩色の一部変更と補修等を行ってすべての作業を完了した。

図95 屋根の組立、瓦葺き作業



図91 舟肘木の製作のようす



図92 仮組作業風景



図93 組立作業開始



図94 虹梁までの組立終了



5. 館外造構整備工事

(1) 敷地造成工

1) 切土（西南部管理用道路部分と東南隅）

管理用道路部分を対象に21tブルドーザーが標準だが施工規模と造構への影響を配慮し、6tで慎重に行った。

2) 盛土

発生土と搬入土（真砂土）を使用して30cm毎に6tブルドーザーで整地した。

(2) 園路広場工

1) 階段（展示館入口と造跡公園北東入口）

自然な感じがする擬石仕上げ（稻田石）のコンクリートブロックを使用した。

2) 階段

（展示館東側 第I、II期と第III期造構表示面の境）奈良時代（東側下段面）と平安時代（西側上段面）を分けるために、自然な素材だと誤解が生じる可能性があるので現代的なコンクリートの階段とした。段差の明示と滑り止めを兼ねて各段の段鼻には化粧目地をそれぞれに2列入れた。

3) スロープ

a. 展示館入口

自然で滑りにくい舗装材として、擬石階段ブロックに合わせた自然石の粒石を接着剤で張り、表面仕上げとした。

b. 造跡公園北東入口と造跡公園南西入口

黒色ではまわりの雰囲気と合わないのでカラースファルト（茶色）で施工した。

4) 通路（展示館入口踊り場、展示館北側外周、東側軒下、造跡公園北東入口および踊り場）擬石階段ブロックの風合いに合わせた粒石で表面を仕上げた。

5) 出入口

展示館の東側から外に出るために2段のコンクリートの階段を設けた。南側では自然土舗装をすり付けている。

(3) 休養施設工

1) 木製ベンチ

第I、II期造構配置がわかり、外周からも目立たず、しかも午後には日陰となる展示館東側に2ヶ所設置した。



図96 展示館正面入口の作業風景



図97 展示館正面入口の作業風景



図98 北東部入口踊り場粒石舗装作業



図99 第I期東門跡周辺の作業風景



図100 管理用道路周辺の作業風景



図101 展示館東側の舗装作業風景

(4)修景施設工

1)張芝

奈良時代の面とした公園東半分は葉や茎が荒いノシバを、平安時代の面とした西半分には、時代の違いを強調するためにノシバより纖細なコウライシバを張った。なお展示館の軒が高いので試験的に軒下にも張芝を行った。

スロープ部分や、ベンチ・説明板周辺等の利用者がよく通る所には踏圧により芝生が痛むので合成樹脂製の保護材を設置した。

2)地被（展示館入口、遠路公園北東入口、土星北側）

見通しを確保するために低木でなく地被を植栽した。また、植え込み部分には乾燥と雑草防止と修景を兼ねて広葉樹皮を敷き詰めた。

(5)管理施設工

1)外構工

石積み等の天端には転落防止用に縦に桟が入ったパイプ柵を設置した。色は目立ちにくい焦げ茶色にした。また、土星や外周園路との境には杉の焼き磨き仕上げの柱を土中に建て込み、マニラロープを2段付けたロープ柵を設置した。

2)排水工

造構表示の南側には芝生の止めを兼ねて皿形側溝、造構表示面には集水溝、スロープには土砂の散布を防ぐために横断して側溝を設けた。

排水管には施工法が簡単で重量が軽い硬質塩化ビニール管を採用した。また、水はけが悪いので芝生の下には軽くて施工がしやすい樹脂系の透水管を布設した。

3)照明工

利用者が自由に入れる都市公園内なので、保安灯として照明灯を設けた。経路としては展示館入口と遠路公園部分の2系統に分け、それぞれ既設の公園内の電柱から分歧して照明灯に引き込んだ。遠路公園部分は今後の照明計画の変更が見込めないので電線管を使用せずにスチールコルゲートケーブルで配線した。



図102 公園東側(奈良時代の面)の芝張り作業



図103 地被類植え込み作業



図104 パイプ柵取付作業



図105 皿形側溝据付作業



図106 排水ビニール管の付設作業



図107 透水管付設作業

(6) 教養施設工

① 第Ⅰ期造構表示

<東門>

柱、地覆木、軸木はクラッシャーランの上に横向きに根柢をつけて据付け、まわりを真砂土舗装で固めた。

基壇の外周は、日本庭園に使う山石緑石をできるだけ天端が揃うように注意しながら、直接地面に埋め込んで表示した。

真砂土舗装（真砂土+固化剤+顔料）は品質を安定させるために、舞鶴公園内に設けたブランドで表層材を混合してからダンプトラックで現地に搬入し、人力で敷きならした後、転圧して固めた。表面を仕上げる際にはベニヤ板を敷いた上から転圧した。第Ⅰ期については、「赤真砂」をイメージして赤の顔料を多くした。

<塀>

柱、軸木は東門と同じように施工したが真砂土舗装は両側に木枠を組んで、転圧した。

② 第Ⅱ期造構表示

<柱跡>

コンクリート基礎に埋め込んだアンカーボルトで縁木を固定して外枠とし、その内側を木レンガで舗装した。

<建物>

柱跡と同じように縁木で外周を明示し、内側を少しふい真砂土舗装で仕上げた。

③ 第Ⅲ期造構表示

<礎石>

礎石は天端の加工が不要なので底石に使うものを採集地に出向き、材料検査をしたものを使った。設計では石質は問わなかったが、施工に際しては東西建物には流紋岩、南北建物には花崗岩を使用し、色調と石質の違いで建物の性格がわかるように配慮した。施工では根石などは入れず平坦な面を上にして直接地面に据え付けた。

<塀>

第Ⅰ期と同じように山石で縁取りをして内側を少しふいがある真砂土舗装で仕上げた。端部は20cmの高低差を解消するために、長さ50cmを緩く傾斜させ仕上げた。



図108 第Ⅰ期真砂土舗装作業



図109 第Ⅰ期塀の柱・軸木据付作業



図110 第Ⅱ期建物柱穴表示木レンガ埋込作業



図111 第Ⅱ期真砂土舗装作業



図112 第Ⅲ期礎石据付作業



図113 第Ⅲ期建物基壇の縁石据付作業

V 結語

以上、鴻臚館跡第Ⅰ期整備について、平成4年度から7年度までの整備計画発案から完成にいたる経過と整備内容について述べてきた。

第Ⅰ期整備はすでに述べたように、本格的整備着手までの当面の仮整備という位置づけで始められたこともあって、整備内容をどの程度までのものにすべきか担当者レベルでは非常に悩み多いものがあった。遺跡の保存という面からみれば、発掘調査後しかるべき措置を施して、施設等を作ることなく埋め戻し、並行して実施されている調査成果をみながら、来る本格的整備まで満を持した方が賢明ではないかといった思いと、またそれに反して、仮整備という言葉にとらわれることなく全体的な見通しの中で現在できうることを最大限実現した方が、鴻臚館跡に対する市民の認識の深まりと共に、将来の本格的整備にとって有意義になるのではないかといった思いが交錯したのは事実である。さらに、市民の鴻臚館跡の整備に託する思いと指導委員会の意向は、まさにこの保存と活用の両面を満足させる内容を実現させることにあったために、悩みはさらに深まることとなった。

筑紫館から鴻臚館までの各遺構の相互の関係、全体的な構成およびその変遷等の検討を踏まえながら整備内容を検討すべきであることはいうまでもないが、関連遺構の学術的評価についてはひとまず置き、整備の主眼を将来の本格的整備の叩き台として、各委員の指導を仰ぎながら提示しようと担当者が意志を固めたときにはすでに実施設計段階に入った時期であった。

したがって、整備内容については、計画の策定過程も含めて反省すべき点が多々あることは否めない。しかし、一面では、本格的整備に向けての第一歩が今期整備の完成とともに始まったと考えている。そういう意味で、本報告書には検討の過程で交わされた論点となるべく盛りこむこととした。また今期整備における問題点と課題については表27のようにまとめてみた。

表にもれた問題点はまだ数多くあるが、総括的には、段階的な計画を踏まえながら本来進めるべきところを、短期間の内に整備の実現を図ったことに問題点は集約される。相次ぐ計画変更は、多くの関係者に困惑をおかけすることとなった。今回の整備でいたらなかった点については、担当者として総括し、来る本格的整備へ向けて引き継いでゆこうと考えている。また、報告でほとんどふれなかつた「活用」については、実際の使われ方を注視しながら、利用する側に立って考えてゆきたいと思っている。



図114 見学風景

表27 第1期整備の問題点と課題

計画策定段階		施工上の問題	
全体的作業 展示館 展示	整備基本方針の決定が遅れた。 整備方針が明確でないまま、個別の整備案件を進めた結果、各工事専任者が予定より1ヶ月遅延する割合が下卸きも含めて4割に及び、最終整備において割合が高まってしまった。	・設計作業が遅れた結果、各工事専任者が予定より1ヶ月遅延する割合が下卸きも含めて4割に及び、最終整備において割合が高まってしまった。	・資金収支に即して、整備方針を固め段階的にスケジュール立て本質設計に十分時間をかける必要がある。 ・施工時には、各工種の施工部門に、整備進度を熟知し全体工程を管理する責任者を要す。
	・基本設計にあけられた見付もりではなく、実施設計段階で新たに発生した問題を抱え、各構造条件との調整が後出しになってしまった。 ・基本計画と実施設計が並行して行われたことから、設計完成が遅れ、全体の工期内に少からず影響を与えた。	・係官が他の整備施工と日程の調整を図るが難しかった。 ・整備施工との併用スペースの調整を図るが難しかった。 ・(会社的)施工日程に関わる問題。 ・既存トラックでの足場設置のために、通常なら運搬業者による搬入が原則であるが、この場合は、工期を保つために、自ら搬入した。 ・既存地盤と整備施工区間に分かれているが、動物側面については展示施設敷地の一端として計画したが、施工すべきだった。	・自然気概であり、建物素材が真木板であることから外気の温度など環境変化を直感受けない方法を、しかしるべきデータを軸内で得て今後検討すべきである。 ・軒下の開口部は展示品のために設けたため、晴天時と暴雨時の開口率に差がある。一定の開口率を保つためにも初期開口方法は十分検討すべきである。
	・今回採用した「片持ち柱」型の柱構造は基盤強度を重くする必要があり、地盤の強度を予測することとなった。 ・既存計画・既存地盤との連携をうまく図れなかかった。 ・前の土壌保全の計画(温度・開封仕事等)が不十分だった。 ・建築模型製作計画を含んだ設計を既存の施設の際に引いておれば、違った形の既存設置方法の選択も可能だった。	・外気の自然流動を促進するための遮熱ドア取扱が、既存用機器によつて十分機能しない結果となつた。 ・「既往実績の参考」コーナーでの展示品が開閉4ヶ月間で壊滅的であった。保管庫として展示用のガラス高さを、28cmから120cmに変更した。 ・見学者の整備操作に対する関心は非常に高いが、補助的な説明が足りないために、建物を通過する際解説を説明する」という方針を採りたしている。	・コンピュータグラフィック等を用いた説明機器による解説を行うなどの展示の充実が今後とも必要である。 ・自然換気という条件下での展示品、遺構の昼夜変化に注意する。
	・展示設計は、道路部分の展示を主な対象としたため、遺構展示部分を含めた全般的な計画が十分構成となかった。 ・展示新規例が既存構造計画と反映できなかつた。 ・コーナーテーブルに沿つた出し構物の展示を検討できなかつた。 ・本標準の保存処理を行つた遺物の展示環境について検討が不十分だった。	・集成材表面の化粧板が「焼け」による色ムラが牛じる可能性がある。化粧板が日立屋所がある。 ・既元瓦の川合谷や、色彩の範囲、木材の大きさ、彩色体のプロトーションなど、既存構造計画で読み切れない部分について、1/20既存の模型で検討する必要があつた。	・将来の本格的な整備に備えて、内容説明のための両面を引き立てるとともに、古跡系復元にあたっての基礎資料の集積が必要。 ・既存模型の維持管理は木材表面の色調、黒板のハガキ、ズレ等の経年変化で注意していく。
	・既元対象物は子房的建物と想定して化粧を試みたが、子房的建物と同解説がありその苦痛について十分享かりた。 ・想定しないまでの複元だった。 ・建物模型製作設計において、学術的な正確さを期しながら、わかりやすい展示物をどう見せるのか十分に検討をかける必要があった。	・集成材表面の化粧板が「焼け」による色ムラが牛じる可能性がある。化粧板が日立屋所がある。 ・既元瓦の川合谷や、色彩の範囲、木材の大きさ、彩色体のプロトーションなど、既存構造計画で読み切れない部分について、1/20既存の模型で検討する必要があつた。	・遺構表示にあたつての意図をよりわかりやすく説明させるためにも、既存保管の方法等を今後とも検討していくべきである。 ・文化財検査で工事専任者が一括になって、整備専門家の整理や手法、素材の選択等の計画策定を行るべきである。 ・使用する素材は、サンプルによる検定ではなく、工例を実見した後に決定すべきである。
	・活用の面で「どう使わせたいか」がはっきりしていなかつた。 ・基本設計と実施設計にあたつて、設計コンサルタントが実施設計の監修がなかつた。 ・遺構の通透性を損なわないように断面の遺構表示面と内部の遺構面との比高差を80cmに設定したが、展示物の基礎設計が先行し、結果として90cmの差が生じた。	・盛土は、解せや切り土を一部に使つたが、遺構保存上はすべて解せ土(既存土)にするべきだった。 ・芝の方向を「大してステージの違う、明暗にすべき。 ・第1層の注水は材の浮き沈みのために傾斜方向を計けたが、傾斜方向で傾く方が効率が良かった。 ・真っ直ぐの土管を既存土に差し込むと黒泥が詰まってしまう。傾斜方向に傾斜を設けると黒泥が詰まらない。 ・既元では遺構のホレンジ安裝の方法には問題があり、採用にあたつては既存表示がふさわしいかどうかから今までめて工例から十分検討すべきであった。	・史跡の表示人による検査は、サンプルによる検定ではなく、工例を実見した後に決定すべきである。

鴻臚館跡 7

福岡市埋蔵文化財調査報告書

〈487集〉

編集・発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1
平成8年3月15日

印 刷 福岡印刷株式会社
福岡市博多区東郡町一丁目10-15

KŌROKAN

7

The Report of Architectural Restoration
at KŌROKAN Ruins
in Fukuoka



March 1996

THE FUKUOKA CITY BOARD OF EDUCATION
JAPAN